

西洋歴史思想の展開

第一部 古代・中世

岸田達也

1982.7.14-16 皇學館大學 224 号室

第1日目 第一限

講義の概説

西洋史概説ということですが、私のこの講義は普通の西洋史概説とは異なる。テーマは「西洋における歴史思想の展開」である。前期と後期に分けて講義をしますが、この歴史思想の展開を辿りながら西洋歴史思想の基本的な枠組みについて述べてみたい。歴史思想において西洋的なものとは何か。この教室は国史でありますから西洋的なものとは何かは比較考察のときに出てくる問題であります。日本又は中国の歴史との比較において枠組みとして述べてみたい。

前期は「ギリシアの時間と歴史観とキリスト教の歴史観」である。ギリシア的構想とキリスト教的構想は西洋における二大構想のためこの二つを取り上げたい。後期は「西洋近代における自然と歴史に関する構想」を中心とする講義となる。おおむね、時代的には前期の講義は古代・中世、後期は近世・近代となる。最後は十八世紀の末までで私の講義は終わる。この前・後期は別個の形をなしているが根底においては一貫している。

補足として、時間と歴史に関するギリシア・キリスト教構想については二大構想であるため取り上げるのである。また、後期は何故に自然を取り扱うかということになるが、西洋近代を特徴づけるのは自然科学の成立と発展である。この一言で述べたことが、一体何を意味するかは現在の皆さんでは想像を絶するものがある。この自然科学の歴史との関連は複雑かつ豊富である。この状況の中でのヨーロッパ近代歴史学の成立はヨーロッパ近代の所産である。これも今は一言触れるに留めたい。

ギリシア文化とキリスト教、特にキリスト教的構想は近代ヨーロッパに深く影響を与えている。これも皆さんの予想を越えるものであろう。前期後期の講義テーマは別であるが、根底において一貫している。西洋における歴史思想の展開という形では講義が無く私独特のものであるため、参考文献がない。しかし、歴史思想に関する若干の文献は必要であろう。それらを挙げておくと日本人のものは

* 『歴史理論と歴史哲学』 人文書院

哲学体系の中の一冊として出たものである。三部からなっており、日本・中国・西洋について述べた共著のものであり、第二部が現代史学の動向についてであり、第三部は歴史哲学の諸問題で哲学者と歴史家との共著である。私はランケルネサンスについて述べているが今回の講義とは関係がない。

* 『原典による歴史学入門』 林健太郎他

歴史家の歴史叙述を翻訳して部分を出して解説を付しているもの。他に例を見ない価値

がある。林健太郎は東大総長を数年前に退官された人で東大の西洋史の教授であった。私は林健太郎の最初の講義を聞いております。(40年位前で私が大学二年の時であった。東京帝国大学西洋史。昭和十八年であったか。) その時の講義はこのようなものではなく、Proisenの講義であった。第一高等学校の教授で東京帝国大学の非常勤講師としての講義であった。林先生のもは有斐閣から史学概論が出版されている。これは戦後つまり、新制の東大の教養部の史学概論の講義録に基づいたものである。これも古くなってしまった。その頃の講義を聞いた者からの話によると有意義なものであったという。

＊『ドイツ史学思想史研究』岸田達也、ミネルバ書房

十九世紀以降が取り扱われ、今回の講義では含まれていない。この中にはフランス・オランダが入っている。ある意味ではドイツ以外の参考になろう。フランスに関しては京大前川貞次郎先生の『フランス革命史研究』副題として史学史的研究。イギリスに関してはない。

次に、西洋人の書いたもので翻訳されているものを四点挙げておく。この四点は講義の本論をなすものである。

＊『歴史の理論と歴史』クローチェ、岩波文庫

クローチェは二十世紀のイタリアの哲学者でありかつ、歴史家である。このクローチェの本は1912-13の論文をまとめたものであり、先ずドイツ語版が出て(1915)次いで、イタリア語版が出た。実質的には大戦前のものである。二部に分かれており、この本の名のように歴史叙述の理論と歴史叙述の歴史を扱っているため、第一部は理論を扱い、第二部では叙述の歴史を扱っている。羽仁五郎の若いときの翻訳である。(余り良くない)

＊『歴史の観念』コリングウッド、紀ノ国屋書店

Collingwoodは有名である。これは二十世紀イギリスの代表的な歴史哲学者で考古学者である。この執筆は1936年で第一・第二世界大戦の戦間期である。原本も手に入る。これも二部に分かれており、第一部は歴史観の歴史である。第二部は歴史の理論。Collingwoodはもう一冊『自然の観念』(みすず書房)があり、この本は先のものと同様のものである。二つを併せて読みたい。

＊『世界史と救済史』レーヴィット Lowith、創文社

ドイツのハイデルベルグの哲学者。日本には馴染みが深い。ユダヤ人であったため、日本に亡命し、東北大学で数年間教鞭をとったので、その弟子が多い。又日本からアメリカに亡命し、その時にこれを執筆した。つまり、第二次世界大戦中の仕事であった。戦後ドイツに帰り、ハイデルベルグ大学で哲学を教えた。原本は『歴史の意味』で、英語で書かれた。この『世界史と救済史』は後で出版したドイツ語版によったもの。編集が変わっていて、新しい時代から遡って古い時代へと進むのである。彼の世界史(Weltgeschichte)は普通の世界史ではない。彼のWeltgeschichteは世俗史が良いであろう。つまり、「救済」=「聖」、「聖」・「俗」への転換の問題である。これは西洋史の重要事項である。

＊『歴史と終末論』Blutmann、岩波現代叢書

「歴史」=俗、「終末論」=聖「聖」から「俗」へ。ブルートマンはヨーロッパの神学

者で、歴史に深い関心を寄せた。ドイツのマールブルグ大学の教授であったが、イギリスで講義をした時のものが英語で出版され、後でドイツ・イタリア・日本語版が出た。聖と俗との問題である。

以上挙げたもの、これは読んでも分からないであろう。これらの参考文献は単なる列举ではない。この Croce → Collingwood → Lowith → Blutmann は一貫した筋が通っているのである。この背後にある見えざる一本の糸が最後の講義のときには見えるようになるであろう。この二十世紀のヨーロッパ歴史思想問題に触れているのである。歴史思想を取り扱うものは、東西を問わず少ないものであるため、この講義は珍しいものである。

第1日目 第二限

序論 歴史の概念

「歴史」という言葉について

Croce の『歴史の理論と歴史』に見られるように、歴史という言葉が多義であるため意味が分からないことがある。「歴史」という言葉は日本では中国から伝来した言葉であるが、ヨーロッパ語においては Historia という古典語から由来している。

History(英)

Historie()

Histoire()

今一つヨーロッパにはオランダにもあるが、ドイツ語には Histrie 以外に Geschichte という言葉がある。日本で普通いう「歴史」は Historia、Geschichte をまとめていっているのである。しかし、それぞれ出所は別である。つまり、言語の背景に文化、伝統が存在し、その意味するところは異なるのである。つまり、歴史の概念、中国、ギリシア、ドイツについて述べておきたい。

「歴史」というと中国由来であるが、今日定説と目されている所によると、中国の古い時代に「歴史」という言葉はなく、ふるい時代は「史」一語、一字である。では、「歴史」という言葉の出るのはいつかという明の末である。この点に関しては狩野亨吉(こうきち)博士の『歴史の概念』がその根拠となっている。(安藤しょうへき?を発見したのが狩野亨吉であった。)このことは狩野亨吉遺文集(岩波)に見いだせよう。つまり、袁黄えんの歴史綱鑑補こうかんほで万暦年間に出されたものである。

日本に江戸に入って明治初年ぐらゐまでリプリントされ広く読まれた。正式名称は『古本歴史大方綱鑑補』であり、十七世紀初頭の万暦34年発刊である。「大方」というのは偏らないで叙述したものという意である。これは先述したように、日本でリプリントされたが、このように「歴史」の言葉は江戸時代に散見することができる。しかし、「歴史」は江戸に入ったものの流行したのは明治維新後、文部省が「歴史」を教育の名称に使用したので普及し、逆に中国にそれが伝わった。中国では「史」であったのである。

史

Historia

Geschichte

この三つの原義、またはその背後の問題に絞られてきた。

先ず、「史」とは何ぞや。

史とは「記事者也」(事ことを記しるす者ものなり)なり。つまり、「史」とは「人」であった。史とは中国では古来記録を司る人であり、史記は司馬遷が有名であるが、史記だけの名詞としてあり、史を記すものであり、つまり史官であった。

史は「史」、つまり中ちゅうと又ゆうの合したものである。

「又」は定説によれば、右手の形で「手に持つ」(又ゆうは有ゆうに通じる)ことである。

「中」は定説がないが、参考までに申し上げると二つの意見がある。

一つは「中」を抽象的なモラルを指すという意見。もう一つは「中」は具体的なものを指すという意見である。

最初の「抽象的なモラル」としては大辞典によると「中正にして公平なることを旨とする」とある。中正を持つ「**中**」の意である。「記事者也」はそのことを指す。

後者の「具体的なもの」と解する立場では

a. 「中」とは^{ちゅう}籌なり。^{ちゅう}籌は物差しであり、天行を^{しる}観測して測定して曆を作ること。つまり、記録を取ること。転じて記す者である。

b. 「竹札」と解する。(とうどう? 『漢字語源字典』) 竹札に記録を記して所定の位置に収めることは記録係の仕事である。日本の「歴史」つを司る人は「記事者(ふびと)」といったが、その読み方は中国の原義を捉えている。

「中」の定説はないが、「史」とは帰する所「事を記す者」となる。

「歴」は経過することの意。天体日月の経過である。「歴史は経過した事実の記録」。転じて行列を意味する。行列の意となると「歴代の史」となり、袁黄の歴史はこの意味である。

中国における「史」の位置

中国において史の占める位置は、西洋ギリシアにおいて Historia の占める位置よりも高い。ギリシアについては Historia の占める位置は低い。文化伝統の中で占める位置は中国、ギリシアとは異なる。中国で史の占める位置は高くギリシアにおける Historia の位置は低い。

中国においては経学と史学は並び立つものであり、中国の書籍分類で有名な「経史子集」(経：孔子、史：司馬遷、集：文学)で見られるように並び立つ。史の背後にある歴史意識とはどのようなものであろうか。中国の伝統的歴史観は史を記する者、何を記録するか。現在を記録する。現在の君主の治世にかかわる全てを記する。これが中国の本来的な歴史である。では何のために記録するか。後世のために記録する。ここには一種の勸戒的なものを有する。現在の君子の善政・悪政を記録するため勸戒的な要素が入ってくる。これは我々が現在用いる記録とは少し意味が異なる。事を記する者の義務は直筆、つまり、ありのままに事を記することである。直筆は言うは易く行いがたいものである。悪政を記録することは君子や権力に反抗することであるから命を懸けて記録することが史(人)の義務である。現に命を落とした者もある。史の直筆の観念は背後において勸善懲悪の春秋の批判精神に由来するものである。つまり、中国の伝統が背後に由来している。司馬遷は孔子の系統を汲むものであり、(春秋学派)新しい学問として史学を成したのである。司馬遷が引用している孔子の言葉があり、『史記』(司馬遷)の中に列伝の最後に太史公自序(司馬遷の『史記』の構想を練ったときの重要な資料の一つ)に、次の文が見られる。

子曰我欲_レ載_レ之空言_一。

不_レ如_下見_レ之於行事_一之深切著明_上也。

この世界の構想と意味の問題は空言、つまり、内容が空疎な抽象的な言葉によって追及するよりも行事^{こうじ}、つまり、人間が実際に行為してきた事実、いわば、人間の行為の跡その

ような行事に即して追及する方がこの世界の構想と意味の問題は痛切鮮明に理解される。歴史叙述の意味（この用語は見られないが）を探し表現したものである。空言と行事との比較。若い者には分からないのである。この二つの意味するところは人生経験を経た者でないと分からない。若い者は空言が得意である。経験がないから。つまり、歴史家は天命である人である。若くして大歴史家は出ない。

ヨーロッパの「歴史」

Tatsache 字引では「事実」とある。それで良いのであるが、Tat: 行為、Sach: 事柄 つまり、行事である。十八世紀にできたドイツ語であるが、古典語「res facti : 為された事」のドイツ語化である。日本語では「歴史の事実」と「自然の事実」は同じ「事実」の語を使用するが、ヨーロッパ語では同じ言葉を使わない。つまり、英語で「fact」、「factum(為された事)」であるが、自然の事実は「fact」とは言わない。これは「data」、「datum」と言う。つまり、「data」は与えられた物、所与である。一方、「歴史の事実」は人間の行為の世界であり、自然の事実の世界とは異なるのである。

第一日目 第三限

Historia

近代ヨーロッパはこの語に発するものがある（先述）。この Historia の原義は「探求」であり、転じて「探求された知識」ないし「その知識の記述」である。つまり、原義は「探求」であるため、歴史・人文関係に限らず自然にも及ぶものであり、つまり、自分の経験から、

判明したもの、研究やその結果を叙述するに至った。アリストテレス以来歴史叙述を指すものとして用いられた。つまり、中国の「史」とは別である。古典的な定義としてはキケロ (Cicero) の定義がある。為されたことの叙述としての Historia。 Cicero の有名な Topos トポスで「Historia Magistra Vitae(歴史は人生の師)」はヨーロッパでは十八世紀まで支配的である。この Topos が十八世紀の末に転換する。Topos 変換。この Topos は為されたことの叙述としての Historia を指していた。ギリシアにおいて Historia の占める位置は低い。何故かは次に述べるが、この背後に存在するものはギリシアの形而上学である。しかも、反歴史的形而上学が存在しているとだけ今の段階では述べるに留めておこう。言葉の背後に文化と伝統がある。

Geschite

この問題はドイツの歴史意識の問題に関連するが、このドイツ語に相当するものはオランダにもある。この Geschichte も日本では「歴史」と訳しているが Geschichte の原義は Historiia とは別で Geschehen (出来事) である。歴史は叙述を指すもの (Historia) と、叙述の対象となるもの (Geschichte) となる。Historie は Historia から派生したものであるが、Geschichte はドイツ土着のものである。

Geschichte は Geskiht (古代高地ドイツ語)、Gesciht (中世高地ドイツ語) に由来する。(高地は内地、低地は海岸寄りのオランダ語等である。) この Geskiht は「運命」、「出来事」、「偶然」であり、Scehan (一段と高い運命により生じるもの) に由来するのである。このように Geschichte はドイツ土着の言葉である。一方、ドイツには西洋古典語由来の Historia があり、ドイツの文献でこの二語が用いられたときこれは明らかに使い分けているのである。Historia は歴史研究、歴史学であり、Geschichte は出来事である。今日では Geschichte で歴史叙述を指すこともあり通用しているが、原義は異なることを注意すべきである。

Geschichte の両義は [1.historische Forshung: 歴史研究、2.geschichtliches Geshehen: 歴史上の出来事] である。Historiia と Geschichte の区分があるため、独自の歴史・神学を展開したのが Blutmann であった。Blutmann の Geschichte と Historia の展開があるのはそのためである。これは二十世紀の最大の貢献の一つとされている。Korygma(ケルグマ?) の発見に関連しているのである。

Geschichte という言葉。 die Geschichte。 集合単数 die Geschichte の成立の問題である。これは半年に亘る講義を行わねばならないほどの大問題である。

- 1) 複数形 Geschichten からの転換
- 2) Historia が土着の Geschichte によって排除されるプロセス

この二つが相成って 1770 年代に Historie の意味が Geschichte に含まれるようになっていく。

複数形 Geschichten は現在も使用されており、単なる物語位の意味であるが、この Geschichten は Geschichte の古語である。ランケの処女作『ローマ風ゲルマン風諸民族の歴史』(1824) は近代歴史学の基になった論文であるが、この題名の「歴史」は Geschichten であっ

て複数形である。しかし、これは物語ではない。Ranke は事実を歴史叙述している。1770 年代は重要な年代であって 不聴。

die Geschichte は単数で一段と高い抽象度を表す。Geschichte selbst(または、Geschichte überhaupt) という表現が出てくるが、歴史自体、歴史一般を表して一段と高い抽象度を示し、動作の主体となっていることを示している。

Topos として「Weltgeschichte ist Weltgericht. 世界歴史は世界審判である。」歴史が審判であり、裁くのである。つまり、歴史が行為・動作として捉えられるのである。つまり、「歴史が証明する。」とか「歴史が判明させるであろう。」とかはこの発想に由来している。1770 年のこの判断の成立は同期の Geschichte Philosophy の成立と期を一にする。(この philosophy の成立は Helder により成立した。)

先の「世界歴史は世界審判である」はヘーゲルの言葉として有名であるが、これの元はシラーによって用いられ、ヘーゲルに引用されて有名になったものである。この Topos 変換 ランケ→ヘーゲル は (聴きとれず)。

ヘーゲルの Topos

ベルリン大学の講義で「世界史の哲学」の有名な序に「歴史における理性」があり、その中で「geschichte という言葉は客観的方面と主観的方面とを総合して事件 (res geste: 為されたこと) を意味すると共に、事件の記述 (historia rerum gestarum) を意味する。」と述べた。つまり、この Geschichte にこの二つの意味を付与したのは、二つの意味が融合していた当時において (1770 年を経ていた) 初めてなされたことである。

史、Historia、Geschichte をこうして概観してみるとその背後には文化、伝統がある。つまり、問題の発見・所在を問うことが重要である。誰かが答えを知っていてそれを解くというのではなくて、更に、誰も答えを知らない問題を解くというのでもなく、そこに問題が有ること自体が知られていないという問題を発見し、問題点の所在を知ることが重要である。

トインビー (Toynbee) 1975 年没 85 才

『A Study of History』12 巻 1934-196 ?、

トインビーの死の直前に縮刷されたもので『図説 歴史の研究』(1972 年)(日本版は 1975 年)の中で「何故歴史を研究するか」の中で興味ある見解を提示している。

「事実というものは既に出来上がっていて、歴史家に拾い上げられ、利用されるのを待っているというものではない。」

次いで、カー (Carr) の言葉を引用して紹介している。「事実は歴史家が呼びかけたときにだけ語るものであり、どの事実に発言権を与え、どういう順序と文脈によるかを定めるのは歴史家である。歴史家の解釈から独立して客観的に存在する歴史的事実というようなものを信じ込むのは前後を転倒した誤りである。」(Carr: 『歴史とは何か』(1961))

この背後にあるのは十九世紀歴史思想から二十世紀歴史思想への転換である。Carr の

『歴史とは何か』は1961年に出たのであるが、意味するところは colligwoodと同じ年代である。つまり、「歴史とは何か」という問いかけそのものが二十世紀そのものである。

「歴史とは特定の時と場所にいる特定の人間が問題を組み立てることである。」更に、トインビーは「歴史の循環論的な見方ともう一方の直線的な歴史の見方」と言ってそれ以上はなんら言葉を入れていない。トインビーは何も言っていないが、私の講義の根底のテーマである。シンボライズして言えば、円環と直線。「○とー」であります。講義が終わればこの意味が分かってもらえるであります。

第一日目 第4限

西洋の歴史叙述の発達、思想の展開には三つの大きな区分がある。

第一期はB.C.5世紀

第二期はA.D.5世紀

第三期は18世紀末から19世紀初頭

第一期はギリシア、第二期は中世キリスト教である。この二つは西洋の二大根幹となるためにこれを前期に講義する。第三期は史学革命の時期であり、近代歴史学の成立期である。この講義は史学革命の前史で終わりとなる。しかし、それで西洋歴史学の基本的な事項は述べ尽くされる。十九世紀については大学院生向きの別の特別講義がなされる。史学革命を初めて耳にされる方も居よう。近代自然科学の成立—科学革命と言われるが、それにちなんで近代歴史学の成立を史学革命と呼ばれている。

第一章 古代ギリシアの歴史

第一節 ギリシアにおける歴史思想

ギリシアにおける歴史思想の展開はヘロドトス、ツキディデスの二人の歴史家によってなされた。西洋最初の歴史叙述が誕生した。単なる年表や伝説から区別されたもので個人が

自発的に執筆したのである。

古代オリエントの歴史と対比するとこのギリシアの新鮮さの画期的な意味が明確になる。オリエントの歴史叙述の特徴は 不聴。

参考文献は

ヘロドトス (松平千秋訳) ; 『歴史』 (上・中・下)、岩波文庫 .

ツキディデス (久保正彰訳) ; 『戦史』 (上・中・下)、岩波文庫 . (原題は「歴史」。)

この二つは『世界の名著』 (中央公論社) に一巻本として収められている。

なお、『世界の名著』全集には次の歴史家の著作が収められている。

Ranke(独)

19c. Burckhardt(スイス) ルネサンス

Michelet(仏) フランス革命史

Meinecke(独) 近代国家理性の理念 (岸田訳)

20c. Huizinga(蘭) 中世の秋 (20c. のブルクハルトといわれる)

Toynbee(英)

トインビーの言葉を挙げておく。

「歴史家を通して歴史に入っていく。」 歴史家の名前を知るとはやはり重要であろう。

古代オリエントの歴史記録

古代オリエントでは個性ある歴史家の歴史叙述は見られなかった。エジプトでは王の名表とか事跡表はあるが、これらは歴史叙述ではない。また、メソポタミア B.C3000 年位のものを書いたものはあるが、それらも羅列であり、歴史ではない。

古代のこのような状況の例外とでも言えるものはヘブライである。「ダビデ王位継承の記録」は古代オリエントの歴史叙述で出色のものである。学会ではこのように呼ぶが、旧約聖書の中に記されており、サムエル記下 9-20、列王記上 1-2 にあたるのがそれである。これを読んでも面白い。バテシバ (レンブラント バテシバの水浴) とダビデ、ダビデの子の反乱、近親相姦。古代ギリシアと比較すると同じものではないことが分かる。これは在来の記録の編纂したもので、年表と同じく歴史叙述ではない。また、神の声として書かれ、そのためバイブルの中に入るのであるが、これもギリシアとは異なるのである。これはヘロドトスの世界とは全く異なる。

ヘロドトスの歴史叙述

ヘロドトス (Herodotos) の開巻劈頭の中にギリシア歴史の叙述の精神・思想が凝縮され

ている。

「これはハリカロナソス ヘロドトスの研究であって、人間の巧業が時と共に失われ、又ギリシア人と夷狄の民とによって示された、偉大にして驚嘆すべき事柄、殊に彼らが如何なる原因から相戦うに至ったかがかえり見られなくなることはないように、研究調査して発表するものである。」

一見して何の変哲もない文章であるが、ここにギリシアの歴史思想の凝縮がある。これを分析してみよう。

1. 「研究」の個所

原語は「Historia」（研究調査を意味する言葉）であり、ヘロドトスにおいても既に物語ではない研究調査を意味していた。ヘロドトスが彼以前の logopoios と彼とを区分するのは正にそこにある。logopoios は物語作者を意味しヘロドトスが見下した意味で用いている言葉である。自分は logopoios ではないことを言ったのである。

これはツキディデスでは更にヘロドトスをも logographos(物語記者)として扱い、ツキディデス(Thukydides)は自分の立場を明確にした。ヘロドトスが logopoios として挙げたヘカタイオス(Hekataios)ですら、ヘカタイオス自身の著作の中に「ミレトスのヘカタイオスかく語る。以下、私に真実と思われた所を書き記すが、それはギリシア人の間の話は私の見る所では笑うべきものが少なくないからである。」をみる。つまり、ヘカタイオスですらこのように述べているのに、ヘロドトスは軽蔑し、そのヘロドトスですらツキディデスは見下したのである。ヘロドトスの歴史はミイラの作り方までもが出てくる。肝心のペルシア戦争は出てこない。しかし、ツキディデスはいきなりペロポネソス戦争が初めから出てくる。このように「探求」が高まっていくのである。

2. 「人間の巧業」の個所。またそれとの関連において「如何なる原因」の個所

ヘロドトスにとって歴史叙述の対象は人間の行為・巧業であり、それが失われないように書き留めようとしたのである。又、彼らが如何なる原因から相戦うに至ったかを書き記そうとしたのである。aitaia これは普通「原因」と訳されているが、これは自然科学の原因とは異なり、「動機」と訳される方がよく合う。その歴史叙述を人間の行為に当て、その行為の原因・動機に還元されるものとして表現しようとした。これはヘロドトスだけではなくツキディデス、ホリキュロスも同じく心理的原因つまり動機に焦点を当てた。そのような動機の解明に「歴史」を当てたのである。この「原因」は現代・近代の「原因」ではないので、むしろ、自由な想像による動機として対象とした。.... ?

動機の解明に歴史家の役割がある。これは pragma の問題である。

pragmatism。プラグマティズム。実用主義。Pragmatismus。

この pragmatism は実用主義では意味が通じないことがある。これは pragma の意味が無い我々日本でのことである。pragma の原義が分からないと表現できないものがある。Pragmatische Geschichte(Historie)は実用的歴史では意味が分からない。しかし、この訳が多い。

「実用的歴史では意味をなさない」ということが分からない人が多い。その人達は問題の存在が分からないのである。

前期二日目 第一限

今回はヘロドトスの冒頭の言葉を引用分析することによりギリシアの歴史思想を考察した。今日はそれに引き続いて述べる。

3. 「ギリシア人と夷狄の民との諍い」の個所

これがヘロドトスの主題である。ギリシア人と夷狄の民（異民族：バルバロイ）が宿命的に対立するものとして捉えられており、これは未だ素朴な形ではあるが東洋と西洋を対比的に見る先駆として認められる部分であり、ヘロドトスのポリス市民としての性格が現れている。ヘロドトスの『歴史』はペルシア戦争を扱ったものであるが、バルバロイ（barbaroi：汚い言葉をしゃべる者）に対立する意識を記述したのである。オリエントの民は agoreuon をしない。つまり、agora（広場）で語ることをしない。つまり、ギリシア人の中華思想を表している。東洋と西洋を対比的に観る見方が明確になるのは十八世紀の啓蒙時代になってからのことであるが、その先駆をなすものである。これはヘロドトスのみならず他のギリシアの人々の共通したものであった。「ギリシア人と夷狄の民との抗争についての統一的テーマ」と一言で述べたものの、これはヘロドトスの歴史書の成立に関したものの、つまり、モチーフに関わる問題である。これは一種文献学の問題であるが、その問題に限らず、それを越えてモチーフ考察に及ぶものである。このヘロドトスの『歴史』の成立については分解派と統一派の考えがある。分解派はドイツの文献学であり、ヘロドトスは最初から歴史家ではなく地理学者であったものが歴史に進んだ人であったという説である。ヘカタイオスのような地理探求者であり、ヘロドトスから logopoios と呼ばれた人で雑多な地理的見聞を集めた人であった。ヘロドトスはハリカロナソスからアテナイへ行き、そこでペルシアを聞いて歴史家になった人であった。最初はミイラの作り方から始まっているように、見聞録を作る予定であった。その内に歴史叙述をしたのである。

統一派は最初からペルシア戦争を記述することが目的で第六章以降のペルシアを書こうとしていた。このヘロドトスは大旅行家であったため、この歴史書の中にペルシア戦争以外のことが挿入されたのである。現在はこの統一派の意見が有力とされている。

4. 「ハリカロナソスのヘロドトス」の個所

これは顕著な傾向である。歴史書の冒頭の最初に自分の名を記することは重要なことである。これはツキディデスの最初の文が「アテナイ人ツキディデス、ペロポネソス人とアテナイ人の相戦った次第^{しる}を記す。すなわち、両国の戦争の最初からその戦いの比類無き重大さを自覚して、その記述を企てた。」とある。ヘカタイオスの冒頭の文章「ミレトスのヘ

カタイオスかく語る。以下私が真実と....。」つまり、ポリス市民は個人の自覚において、オリエントに比して顕著であった。これは古代ポリスの限界内においてであり、現代のものとは異なるが自覚の現れであった。自分の名と出身地それから目的を記しているのである。ギリシア歴史叙述の特徴である。

5. 「相戦うに至った」の個所

ヘロドトスの歴史はペルシア戦争であり、ツキディデスはペロポネソス戦役史であった。つまり彼らには歴史は政治と戦役史であり、それも彼らの時代のものであった。つまり、彼らにとっては現代史であった。これはギリシア歴史叙述の顕著な特徴であった。しからば、なにゆえ歴史はギリシアにおいて軍事と政治の歴史として捉えられたか。その根底には広くかつ深い問題がある。その背後にある問題について若干述べてみたい。（「政治、軍事、現代の歴史である」と言っておわっても良いのであるが、その根底を観なくては皮相浅薄である。）その根底には古代ギリシア市民の物の考え方に関わるものがある。古代市民の本来的性格は消費者的性格である。古代市民は本来非生産的であり、物質的な生産を技術的かつ賤民的現象として軽蔑して卑しい生活手段と考える。つまり古代市民のエリート自由人には直接生産手段に携わることは相応しくないと考えていた。アリストテレスの『政治学』の中に「市民が腰をかがめて生産手段に従事することは市民の肉体を損ずることとなり、そのようなことは奴隷に任せるべし。」とか、又、アリストパネスはユートピアを描いた作品の中で生産に従事する者は奴隷であると述べている。アリストファネスは喜劇作家として有名であるが、彼の作品はギリシア社会史の重要な文献である。『女の議会』は面白く婦人がもし参政権を持って議会を行えばどうなるかという論議がなされていて、しかも内容はここでは言えないものがある。一読を勧める。これはつまり、古代市民というのは伊勢に住んでいるから伊勢市民と言うのとは異なる。市民権を得るために制限が設けられ市民....?を課される。在留外人・奴隷は市民権が無く、土地を取得できない。市民章を持っていないといけない。ここに市民団の支配が成立する。中小土地を所有する中堅市民がギリシアのポリスを支配し、ギリシアの民主の中核をなした。市民団は重装兵を作り、重装兵民主政をしいた。戦役に参加することにより政治における力を発揮した。彼らの関心事は正に政治と軍事とであった。経済ではなかった。ここに現代史の重要性がある。又、このような状態の下で市民は自由な時間を作ることができ、よって、agokeon が可能となり、そこで政治芸術が論じられた。

B.C 4世紀に入るとポリスの崩壊期であり、ポリス間の抗争が起こり、戦争により農業が荒廃したこととポリス内部の派閥の争いにより敗れた市民は亡命し、中堅市民は没落していった。そして、落ち行く先は傭兵であった。（市民の持っていた技術は農耕技術ではなく、戦いの技術であった。）

このころ、イソクラテス Isokrates は当時有数の政治評論家であるが、「当今最大の問題は亡命と傭兵である。」と述べているが、正にその通りである。これはギリシア文化を考察し

ていく上で鍵となる。ギリシアにおいて学問の理想は何であるか。「Theoria である。」これは「theory: 理論」を思ふであろうがギリシアの theoria は「観照」であり、純粹に理論的な研究である。手による技術は奴隷のすることであり、市民の仕事ではなかった。ギリシアでは技術が発展しなかった。消費者的性格であったから。近代自然科学はギリシアの技術の偏見を克服して頭と手を結合したものである。(理論と技術)

古代市民社会というのは Homo politics(政治人) である。つまり、ヘロドトスは亡命者、ツキディデスは追放された人間であった。ヘロドトスはハリカロナソスの名門に生まれ、政治の抗争の中で敗れ、亡命し、再び故郷に帰ることはなかった。大旅行家でありその範囲はリビア、バビロン、ナイル、黒海に及んだ。ツキディデスはアテナイの名門でペロポネソスの一指揮官として参戦している。作戦の失敗でアテナイを追放されること二十年に及んだ。この間に色々な文献を集め、旅行をした。亡命と追放。これは普通の体験ではなく、正しく政治的体験である。ポリビオスは戦争の捕虜である。三大歴史家は全て異常な政治体験をしている。

西洋歴史叙述の源は現代史であった。歴史家という古文書と取り組む姿が思い浮かぶが、そのイメージは古文書学が成立した近代以降に出来上がったイメージであって、本来歴史は現代史であった。こうして単なる年表や ? からは明確に異なる歴史が誕生した。キケロが「ヘロドトスは歴史の父」と称する由縁もそこにある。B.C 五世紀のギリシアにおいて西洋歴史が誕生した。しかし、ここに新たな問題が起こった。B.C 五世紀にギリシア的歴史が誕生したが、B.C 4世紀においてギリシア歴史が衰退する。何故か。その根底には今まで述べてこなかった問題が出てくる。

前期 2 日目 第二限

B.C 4世紀になると衰退していく根底は何か。B.C 五世紀にはヘロドトス、ツキディデスのあと後継者がなかった。B.C 4世紀のソクラテスの後はアリストテレスをはじめ、隆盛を極めた。しかるに、歴史の分野においては衰退したのは何故か。

1. 対象の変質
2. 形而上学

この二点から考察をしてみよう。

第一の点「対象の変質」とは歴史的世界の変質である。これは政治情勢の変質でもあるが、ツキディデスの特徴の一つに演説の叙述、演説の引用など演説を通して事件の置かれている一般的な状況を語らしめた。登場人物の演説を引用して歴史の動因を探っている。この方法による歴史叙述が効果的になるためには、ペリクレスという人物がおり、演説したことがあったことによって演説を通して歴史の動因を叙述できた。しかし、ポリスの変質・崩壊が始まり、世界の入り組みが広がっていくとツキディデスの方法では叙述できなくなっていく。歴史は叙述の方法を失うことによって衰退していくのである。

第二の点 反歴史的形而上学

B.C 五世紀のギリシアにおいて西洋歴史学⁴が生まれたが、ギリシアには歴史意識を阻む

体質を内在していた。それは反歴史的な傾向を有したギリシア形而上学であった。プラトンにおいてこの傾向が強かった。プラトンのイデア論。イデアとは何か。Idea は理念とか観念とか訳としてあるが本来は「形」エイドスである。これは数学的認識の対象であり、幾何学が特にそうであり、真の認識、不変のものを理想とした。人間の行為を対象としたもの、これは転変の世界に属するものであり、単に現象の世界に留まるものであり、真の認識のものとはなり得なかった。学問の理想は Theoria 観照である。何を観るか。形を観るのである。形・本質を内的直観によって把握する。これがギリシアの認識の原型であった。ギリシアの数学は幾何学であった。認識の対象は形相の直観を基礎とする幾何学であった。(c.f 近代自然科学の基礎は力学であった。「動」を対象としたものであった。)

アリストテレスにおいてもそうであって、『詩学』の中で「歴史は詩よりも価値が低いもの」とした。アリストテレスの『詩学』は講義の覚え書きであってプラトンの芸術の否定論の反駁である。プラトンは「芸術は模倣（イデア）の模倣である。」とした。『詩学』は創作論の古典である。創作 poiesis。一読を勧める。しからば、その両方の価値の区別を生じせしめるものは何かというと「歴史学は実際に起こったことを描き、詩人は起こりうることを描く点にある。詩は普遍的なものを表現しようとするが、歴史は特殊なものを表現しようとする。」

6. 「偉大にして驚嘆すべき事柄」の個所

これは正しく特殊なことである。ツキディデスの『戦史』の冒頭部分にも「アテナイ人ツキディデス、... その戦いの比類なき重大さ ...」とあった。つまり、特殊を扱っているのである。

アリストテレスにおいて価値の序列がある。詩は歴史よりも哲学的であり、価値のあるものである。

1. 哲学 Philosophy
2. 詩 Poiesis
3. 歴史 Historia

中国において「史」の占める位置は高く、ギリシアにおいて Historia の占める位置は低い。中国では前述したように、「経史子集」と言って、「史」は「経」すなわち「孔子」と並び立ったのである。アリストテレスの『詩学』はギリシア悲劇を扱っている。アリストテレスは真理は常に普遍的であり、個別ではなかった。ライプニッツは事実の真理と個別の真理とが論じられた。

アリストテレスと歴史学。アリストテレスは万学の人でありアリストテレスには『アテナイ人の国政』という著作がある。これを見ると「アテナイ国政史」である。万学の祖とされているが、このように「歴史学の人」であったかという問題がある。アリストテレスの『アテナイ人の国政』は（村上堅太郎訳、岩波文庫）十九世紀のギリシアの政治についての大発見の一つである。大英博物館が十九世紀の末にエジプトに出土したものを取得したものである。シュリーマンのトロイの発掘は有名であるが、それと並ぶ発見である。それで、この発見がギリシア学の流行を招いた。第一部は国政史であり、(アテナイ史)、第二部はアテナイ誌であった。

さて、アリストテレスは歴史家であっただろうか。アリストテレスは歴史の講義をした跡は全くない。特別の著作を残していない。こうも言っている。「人間の行為について書いた人々の探求は有益である。しかし、これらの全ては政治学の問題である。」前半の文章の下線部は Historia を意味している。しかし、それらは政治学のための個別資料として収集されたのであって、個別の人間の行為それ自体に意味が与えられたのではない。つまり、アリストテレスは歴史学者ではなかった。資料に対する態度や正確さから見て歴史的な第一級資料とはなり難いものであり、歴史書として『アテナイ人の国政』を読んではいけないものである。むしろ、政治学のための資料であり、歴史を目的としたものではなかったものであり、そのため歴史叙述は偏見に満ちたものであり、不正確である。B.C 4世紀の哲学の隆盛の中で反歴史的形而上学の中で Historia の占める位置は低くなっていった。このように、背後には文化と伝統があった。ギリシア人は転変の世界を対象としなかったが、ギリシア人は転変の世界に関心を持たなかったのだろうか。そうではない。むしろ彼らは転変の世界に対して、時間に対して痛烈な感情を持っていた。変化する転変、時間に対して痛烈、強烈な感覚を有していたからこそ、一層不変かつ普遍的なものに対して理想を求めたのである。この精神のパラドックスを見逃してはいけない。「Peripeteia: 運命の急激な転変・逆転」を悲劇に描き、歴史において叙述したものである。この peripeteia は突然やってくる。これは人間にとって最も恐ろしいものであった。初期悲劇の中心テーマであった。三つのステージ。1. 登りゆくクライマックス。2. 落ち行く予兆。3. カタストロフィー。悲劇の三大作家の作品は全て翻訳されているが、その中で一つを挙げるとしたら、ソフォクレスの『Oidips』であろう。これはアリストテレスの悲劇の中心となったものである。

Oidips。これはフロイドの Oidips complex の基になったものである。フロイトは「男の子が無意識の内に父親には敵対心を持ち、母親には愛着心を持つ」とした。Oidips 伝説は Homeros 以前からの伝説でソフォクレスが取り上げたもの。知らずして父を殺した Oidips が知らずして母と交わり子を生み、幸せにいったとき、予兆を表し、その内、妻が実母であることを知り、悲劇が到来する。母は自殺し、Oidips は両眼を潰して山の中をさまよう。oidips(= 腫足の意味) が決め手となり、peripeteia が訪れたもの。これは良かれと思ってしたことが結果的には思わぬ逆の結果を生み出している。歴史はこのようにドラマチックに展開する。ヘロドトスはアイスキュロスの思想を根底に置いていると言われている。ツキディデスも根底にアイスキュロスがある。ヘロドトスは亡命先のアテナイにおいてアイスキュロスの『ペルシア人』に出会ったとされている。『ペルシア人』はクセルクセスの敗戦に関するものであり、サラミスの敗戦の報告をするところは細かく叙述されている。

ツキディデスが靈感を仰いだのは宗教的演劇、つまり、ギリシア悲劇からであって、イオニアの叙事詩からではない。ギリシアでは Historia の占める位置は低かったが、しかし、Historia はギリシア人にとってある価値を持つものと思われる。それは何故か。この背後の問題は深く、知られざるギリシアが存在する。

7. 「忘れ去られることのないように」の個所

ギリシアの転変の世界は歴史の対象とはなり得なかったが少なくとも一つの価値を持つものであった。これはギリシアの反復・循環・回帰、つまり、物事は繰り返すものだという思想を有していたので、重要な出来事の記述は未来の教訓となると考えたのである。「歴史は繰り返す」。ツキディデスが自分の編纂の目的を書いた部分がある。「私の記録からは伝説的な要素が省かれているために、読者にとって余り面白いものとは感じられないかも知れない。しかし、およそ過去の出来事や、又、人間性に基ずいて将来いつか繰り返されるであろう出来事について、正確な知識を得ようとする人々がこれを有益であると思ってくればそれで自分は満足である。これは一時の喝采を得ようとするものではなく、むしろ、将来いつまでも役に立つものを与えようとするものである。」（第一巻第二十二節 方法論の章）（永田注：『世界の名著』：P331 がこの部分に相当するが、岸田訳の方が優れている。ギリシアの本質が理解できていないとギリシアは翻訳できない。）

循環の思想は一般にギリシア人に認められるものである。アリストテレスは「天球の円運動が時間である。」円環的時間。時間是一種の円である。人事の動きは円環をなしている。つまり、天球の円運動に自分たちの生活が基ずいていると考えたのである。この循環の思想を更に遡れば、背後にギリシアの宗教の問題が存在する。次に述べることは一見歴史思想と無縁のことと思われるであろうが、実は密接な関係があつて、しかも、知られざるギリシア、見えざるギリシアの問題がある。

Orpheus。これは伝説的な楽人の名である。この Orpheus の教団の神話において「人の死すや、その靈魂は Hades において審判を受け、靈魂はこの審判によって定められた他の肉体に再び宿り、かくして靈魂は生と死の循環を経験せねばならぬと考えられたものである。」このような輪廻転生を「必然の輪」と呼んだ。この Orpheus 教団は「魂は天において神々と共に享受していたものであるが、地上に落ちて肉体に宿ったものである。魂が肉体から離れて天上に再び帰るようにしなければならない。」(Pythagoras)

ピタゴラスは「静かなる音楽による魂の浄化(カタルシス)」を説いた。ピタゴラスのエピソードとして、散歩中に犬が杖で叩かれているのを見てそれを止め、「待て。その犬には我が友人の靈魂が宿っている。犬の声を聞いてすぐに分かった。」と述べたという。又、有名な話で杖を持って弟子に教えている。「我は再びこの杖を持って汝らの前で教えるであろう。」と。永劫回帰。しかし、これは現在の通例のギリシア像ではないのである。通例のギリシア像と言えば、オリンポスの神 Olympos の Apollon の明朗かつ現世的な神が通例のギリシア像である。これらの Olympos 神は不死である。一方、人間は死すべきものである。この間は越えることのできない一線がある。ギリシア人はこの一方においての憂いを秘めたペシミストであった。ホメロスの『オディッセイア』の中に「あれは人の子。死すべきもの。」とある。人間は死すべき存在である。この神との越えがたい断絶が言われている。つまり、死すべきものでは訴えることができなかつた魂を Orpheus が救つたのである。

Dionysos のギリシアの北方トラキアの山地で Olympos の神とは異なった共熱的宗教がギリシア本土に入り込んだが、その激情性を除いたものが Orpheus 教団であった。Dionysos は別名バッカスと言ひ、酒・ブドウの神である。Dionysos の宗教は生肉食祭 (omophagia)、狂騒祭 (orgia) を二大特徴とし、生け贄動物を生きたまま裂き喰ひ、女性信徒は炬火をかざし、松果をつけた祭杖を揮って、山野に叫歌狂舞した (松村『世界歴史事典』)。松明をかざして乱舞しつつ駆けめぐる内に魂が肉体から脱離する。Ekstasis (自己の外に魂が出ること) の状態となる。この乱舞 (Orgia) を捨てた Orpheus はピタゴラスの言う静かな音楽による魂の浄化をしたのである。Dionysos は四季の循環、生、死、再生は円環的時間観念は基本である。

ここにギリシアの二大潮流を見ることができよう。

東ギリシア - Olympos - Homeros - Ionia ----- 科学的伝統

西ギリシア - Dionysos - Orpheus - Pythagoras --- 神秘的伝統

悲劇はこのいずれにおいて発生したか。これは Dionysos - Orpheus - Pythagoras の系譜の中から誕生してきた。ツキディデスが靈感を受けたのは宗教的演劇つまり、悲劇からであつて Ionia からではない。この意味が分かるであろう。しかし、この Dionysos から Orpheus、Pythagoras に至る系譜は十九世紀の末に至るまで知られざる、隠れたるギリシアであつた。これを再発見したのは Nietzsche 『悲劇の誕生』 28 才の時の (1872) 著作によつてである。このニーチェ以前は古典主義時代のギリシアであり、Goethe に代表される。十八世紀の Winckelmann (ギリシアの美術史を学問にした人) 「高貴なる単純と静かなる偉大」はギリシア彫刻に題材を採つた印象である。ギリシア的明朗、現世的なものであつたが、ニーチェはそれに飽きたらずギリシア人の根底にある「... 不聴...」。ニーチェは普通哲学者として知られているが、20 代でバーゼル大学の教授に抜擢されたのは古典文献学者としてである。オーソドックスな訓練を受け、緻密な業績で抜擢されたのであるが、彼は従来のギリシア像を覆しそのため反論されるところとなる。「アポロンのものとディオニソスのもの」「悲劇はコーラスから発生する」「コーラスからドラマへ」「悲劇これは音楽の精神からの誕生である」等々。この本は文明批評となつており、又、「生に対する歴史の利害について」もこの「悲劇の誕生」とペアになっている。イギリスのハリソンその他が今日のギリシア学の基礎を築いた。歴史思想という一分野でもその根底は広くかつ深い問題に達する。形而上学、宗教、... が広がり、基の岩盤に行き当たる。井戸を掘り続ける。地下水に達すれば、そこから無限の世界が広がる。地下水に行き当たるかどうかは判らない。判るものは生涯を懸けるに足りないものである。判らないからこそ生涯を懸けるのである。

第二章 ギリシアにおける歴史研究の方法

ギリシアの歴史研究の資料は古代ギリシアにおいては歴史家自身の観察と目撃者の観察報告であつた。「目撃」これがギリシアの資料である。ヘロドトスもツキディデスも目撃者の

陳述を基にしたのである。しかも、無批判に取り入れたのではなく、批判的検討をしてその目的を為したのであった。この点において歴史家は典型的なポリスの市民であることを示したのである。ポリスでは陪審裁判であり市民は陪審員として出席し、その方法的手続き技術を体得していたので陳述をそのまま信用しないで批判的に取り入れた。しかし、これには次の欠点を有していた。

1. 空間的限定

2. 時間的限定

1の空間的限定というのは、このような方法では歴史的研究は比較的小領域に限られた同時代の更に自分と接触することのできた人の目撃談しか資料となし得なかった。逆に言うと、歴史家は自由に資料の選択をすることが許されなかったのである。

2の時間的限定というのは、同時代の目撃者の陳述を基にするため、一つの世代の自伝的歴史叙述であり、この世代が過ぎれば歴史は叙述できない。これでは世界史叙述はできない。

ヘロドトスの第七の分析であるが、「時と共に失われ....」一定の時期の小領域に関する歴史であっていわば、地方的・分立化の傾向を持つものである。しかし、ギリシアにはOikoumene「人間の住む世界の全体」の統一する意識はあったが、しかし、歴史的自覚ではなく、地理的なものであった。歴史的自覚的統一はヘレニズムの時代を待たねばならなかった。

前期2日目 第四限

第三章 ヘレニズム時代の歴史思想

ヘレニズム時代の代表的な歴史家 Polybios(Ca.201-B.C120)、その著作に『歴史』がある。その特徴は次の二点である。

1. 世界史の自覚

2. 政治形態循環論（これで Polybios は有名）

ヘレニズムの歴史思想の特徴は世界史の自覚であり、この二つの特徴をはらむ Polybios の『歴史』の思想の背景を見てみよう。

Polybios は戦争（マケドニア戦争）の捕虜でローマに連行されたギリシア人の捕虜の一人である。マケドニア戦争とは Poeni War とほぼ同じ時代で Poeni War は4回にわたって行われたが、その2回目位に Makedonia War が行われている。

Poeni War

第1回 264-241 シシリー島獲得

第2回 218-201 イベリア半島獲得

第3回 149-146 カルタゴ（北アフリカ）獲得

Makedonia War

第1回 215-206 ハンニバルと結んだー？ーをローマが下す

第2回 200-197 アフリカのザマの決戦

第3回 171-168 Pydna このとき Polybios がローマに連行された。

第4回 146

Polybios はローマの名門 Scipio 家に置かれて厚遇を受けた。Skipio は大 Skipio、小 Skipio があり、大 Skipio はギリシア好みの執政官で Polypios は厚遇を受けたのである。小 Skipio は Pydna の指揮官であった。また、第三回 Poeni War の指揮官であり、Poribios は共に随行してカルタゴの滅亡を目撃している。ローマを中心にして急速に成長しつつあった地中海世界を目の当たりに見聞した。また、Skipio 家に置かれたため、ローマの貴族生活やローマの政治の内面を見聞したのである。

1世界史の自覚

Polybios の歴史はローマの世界が基となっていて、次の所 Oikoumene 「人間の住む世界の全体」がいかんにしてただ一つのものとしてローマのもとに置かれるようになったのであるかを問うところにあった。

第二 Poeni War 以降のローマを扱った。ローマが半島国家から地中海世界に発展していったのを自覚したのであった。これは Polybios の次の言葉に現れている。「このときまでは世界の歴史はいわば関連のない出来事の系列であり、地域は互いに遠く隔たっていた。然るに、このとき以降歴史は関連ある全体となった。例えば、イタリアやアフリカにおける諸々の事件はギリシアやアジアのそれと組み合わせられている。そして全体の傾向は統一に向かっている」

もとより限定された世界史ではあるものの、ローマだけの歴史ではなく、ローマを中心としたヘレニズム文化圏の中のギリシア人の歴史家の世界史である。これはランケが世界史概観でも述べられている。

2政体循環論

通例 Polybios の政体循環論の述べられているところは「歴史は循環論である」である。いかなる政体の故に関連ある全体がいかんローマにより治められるようになったかは、その政治形態を重視している。Polybios は政体が

王政

貴族政

民主政

を循環するとする3区分だけでは不十分としてその墮落形態として

せん主政

かとう政

衆愚政

(筆録できず)

以上が通例に言われたものである。

まず、第一にこの王政、貴族政、民主政の三形態は既にアリストテレスにより述べられている。ローマはこれらの混合形態であるが故に最良の形態である。ローマ共和政前半期の課題は「貴族支配に対して平民が法的身分の調整を計る」であり、この課題を解決したのはBC3Cである。その内部に執政官、元老院、民会を作った。

執政官 = 王

元老院 = 貴族

民会 = 民主政

つまり、この混合形態は古代の最も安定した形態である。Polybios はギリシアのポリスは循環の法則から免れる事はできないとした。何故ならば、それは単一政体であるから。以上は通例言われている事である。

しかし、Polybios はこの混合形態も循環法則を免れないものである事を認めていた。その背景はグラスス時代の暗い光景を目撃しているからである。そしてローマも所詮は変遷していき、やがては法則から免れる事はできないことをみていた。また、この循環の法則はギリシアの抗争を見ていることから判るように人類という思想は希薄である。この法則の当てはまるのは古代市民の社会において考えられるものである。

ヘロドトスやツキディデスと共通するところは以下の通りである。

* Polybios においても歴史＝政治史であった。

古代市民の消費者的性格を濃厚に持つものであった。

*ギリシアの歴史家は自らの政治的軍事的な経験を重んじるものであったつまり、彼らの経験する同時代史＝現代史であり、繰り返されるものであるため未来への教訓とした実用史である。

* Polybios も大旅行家でイタリア、イベリア、南ガリアを廻ってきている。

* 特異な体験をしている。

ヘロドトス 亡命

ツキディデス 追放

Polybios 捕虜

なお、司馬遷は宮刑（死刑に次ぐ重刑）の体験をしている。

天道是か否か。

我が身は木石にあらず。

司馬遷はかんどう（？）家であった。歴史家として深刻な問いかけをしている。

ちなみに、私（岸田達也）はシベリアに抑留され生死を他者に握られたことがある。

歴史家は歴史学が存在しなくても存在する。歴史学は19世紀に入ってからできたものである。Carr「歴史とは現在と過去との尽きざる対話である。」「歴史家が呼びかけたときだけ

出てくる。」

歴史書は人生の書である。

ピレンヌ(Pirenne)は第一次大戦の捕虜(ベルギー)であった。この人もまた20cの三大歴史家(他は誰か?)である。

Pragma

Max Weberの宗教社会学(全三巻)がある。第一巻の序文の中で「非常な発達を遂げた中国の歴史叙述にはツキディデス的なプラグマが欠けている」とある。(以下は岸田先生との電話による永田の追加: Max Weberはこの文でどの様なことを述べたかったのであろうか。ツキディデスの歴史叙述は「原因と結果」の関係を追求することに特色があると言われている。一方で中国の歴史叙述は「春秋の筆法」と呼ばれ、直筆による結果の断定にその特色を見いだそうとすればWeberのような言葉になるのであろう。Weberはこの文については何の説明もしていない。)科学的なものは西洋にしか存在しないというのが彼の論拠になっているのでその様な言葉になったのであろう。ではそのPragmaとは何であろうか。

ギリシア語のPragmaは「人間の行為に結び付いた事実」である。つまり、「為されたこと」。従って、この事実について一方では結果が問題となり、他方原因が問題となる。このように、Pragmaは原因の探求と結び付いた。ここで、「原因」は「動機」というのに近い。ここに、「因果関係の追求」と「動機の追求」の方法とが不可分になり、西洋の歴史叙述の方法論としてPragmaが結び付いた。Pragmaを17世紀のドイツ語辞典で見ると、「Pragmatish: 因果関係によって整理され、かつ、叙述された」であって「実用的な」ではない。ここに結果としての有無を問うPragmatismは転用なのである。

「Pragmatische Historie = 実用的歴史」これでは意味をなさない。Pragamaを上記の意味と置き換えてみると良い。因果的関係によって整理されかつ叙述された歴史なのです。この言葉の裏の伝統と文化を理解しなければ判らないのです。Pragmatismはドイツ語で言い替えると「因果的歴史分析の方法」とある。

前期 3 日目 第 1 限

第二部 西洋中世の歴史思想

第一章 古代的歴史思想からの解放

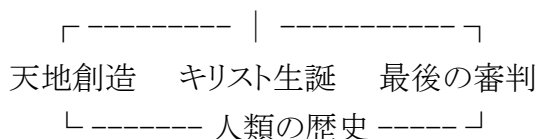
この章では古代の歴史思想とキリスト教的歴史思想を対比させながら進める。

西洋歴史思想の展開は最初 BC5c に見いだされる。第二の展開点は A.D5C である。しかもその展開はことに Augustinus を出発点として、中世を通じて西洋の歴史叙述に深い影響

を与えここにキリスト教的歴史叙述つまり、歴史叙述を樹立した。このキリスト教的歴史叙述つまり、キリスト教的理念を基とした叙述は基本的に共通したものがあり、それは古代的歴史思想からの解放である。以下キリスト教的歴史とギリシアと比較すると3点ある。

先ず、キリスト教的歴史思想は普遍史の理念を樹立することにより古典ギリシアにおける地方的分立化の傾向を克服した。普遍史の理念。これはこれは古代においても世界史の自覚は認められたが(Polybios)、それはまだ限定されたものであり、古代の思想には「人類」の思想は希薄である。しかし、キリスト教においては異邦人も含めて人類は一体的存在として見られている。ここに分立主義を克服したのである。歴史の統一という思想が生じるのもここである。近代編で述べるがここでは一言、啓蒙主義において人類史が確立するが、その源流はこのキリスト教の普遍史の理念である。啓蒙主義は普通、反キリスト教的であり、否定するものであり、断絶があるというのが一般通説であるが、啓蒙思想は傾向としては反キリスト教的であるが、originとしてはキリスト教である。その一端がこれである。キリスト教は理性において一体である人類を考えた訳である。そこから歴史をして人類史として捕らえたのである。神の前で一体的存在であるがこの神が理性として置き換えられたのである。だから、思想の型としては啓蒙思想はキリスト教と同一である。この問題は複雑かつ豊富である。(Dewith や Hotman「聖から俗へ」がここで述べられている。)

第二点はキリスト教的歴史思想は歴史の一回性または不可逆性を確立することによって古代の循環史観から歴史を解放したことである。歴史の一回性、不可逆性からの解放とは何か。古代の循環の思想はギリシアの時間観に相応ずるものである。ギリシア的考えにおいては時間は円環として考えられており、時間は永劫の環を描いて循環し全てのものが回帰する。キリスト教においては時間はいわば直線として考えられており、しかも、直線的時間は天地創造と最後の審判により分割され、その中間の部分が人類の歴史として捕らえられているのである。すなわち人類の歴史は一つの淵源と一つの究極目標を持ち歴史の過程はこの目標に向かっての絶えざる接近を意味した。その意味で、歴史の process は再び繰り返されることのないものであった。



先ず、ギリシア的な考えは初めと終わりを持った直線ではなく、円環として考えられた。ギリシア的救済の努力はこの永劫の時間の円環運動から救われることであつたが、いわば、時間自身から解放されること、人間が時間から束縛されているが、その時間から解放されることすなわちこちらから彼方への脱却(エクスタシー)にあつた。

しかるに、キリスト教においては原始キリスト教の時間概念を表すアイオン aion がよく用いられるが、これは一方でははっきりと限られた時の長さを表すと同時に他方では限界のない測定できない長さを示すためにも用いられる。この限られていない長さ=永遠と訳されているがこの永遠はギリシア的な意味では訳されてはならない。ギリシアは永遠は時間に対して対立するものである。これに対してキリスト教は aion の連なったものとしての永遠である。つ

まり、救済はこの線上で行われるのである。(ギリシアは時間からの脱却であった。)

およそ、歴史の意味ということが問題となるのはいずれかといえばキリスト教である。キリスト教では歴史の目標は目標への絶えざる接近であり、その process の中での出来事は目的を持つと同時に意味を持つものである。しかるに、ギリシアでは目的もなければ意味もない。永劫回帰であり終わりが無い。五月病は目標を失うことにより意味を失うことから生じる。

ギリシアとキリスト教は西洋における時間と歴史に関する二大抗争である。象徴的に言えば、循環と直線、循環と十字架、循環と終末である。西洋の時間はこの二つから成っており、いずれかを強調するかというにすぎない。この枠組みから脱していない。

進歩史観はここ 200 年ほどの所産に過ぎない(フランス啓蒙主義)。この源流はキリスト教であり神学的前提である。これは直線的な時間観不可逆的時間の中で考えられるものである。啓蒙主義がキリスト教を否定してもその思考型はキリスト教であり、キリスト教的時間である。こうしてみるとこれは現代にも通じる問題である。知らずして進歩する考え方はキリスト教に由来するものであり、単なる進歩ではないことに注意。進歩の中に含まれているものは複雑かつ豊富。トインビーはどちらかといえばギリシアの系譜、シュペングラーも(そう?)である。近代・現代の歴史思想はこのいずれかの系譜または混合である。

時と永遠。日本において永遠(トコシナエ)とは「床石の上」であり、磐石ナ上(トコシナエ)つまり、磐石(ばんじゃく)が永遠なのである。日の丸の歌参照。トキとは「とく」という動詞からきている。帯をとく。締まって固まっているものをゆるくして流動できるようにすること。ここからきているので、物がゆるみ、流動することとして時を把握する。流動するものの意。これはギリシアやキリスト教のものとは異なる。「行く川の水はもとの水にあらず」無常につながる。

これに更に中国を合わせれば中国はまた日本とは別である。中国、日本の時間と歴史の文献は余りにも少ない。中国の時間は循環論的時間論が通例言われているが、これは単純な循環ではなく無限宇宙時間論であり初めも終わりもない時間。全てを相対化する虚無である。神もキリストもなく幾千年きているわけである。

日本、中国、ギリシア、キリスト教各々歴史、時間が異なる。トインビーの言葉を思いだして欲しい。「歴史の循環と直線」。これは正に西洋人トインビーの発言である。トインビーはこの2つ以外に日本や中国の時間や歴史観を知らないからである。つまり、特殊西洋的歴史思想の象徴的表現である。

第3はキリスト教的歴史思想は歴史の時代区分を設定することにより古典古代の歴史家にみられる遠近法の欠如を克服したものである。即ち、古代の歴史家は歴史の移り変わり推移を巻別に分けこの巻ごとが意味の区分を意味したけれどしかし、それが時代区分ではなかった。しかし、古代に時代区分法が無かったかと言えばそうではない。古代の時代区分は歴史外の人物によりなされた。

キリストの生涯を基準として2つの部分に分かれている。通例キリストの誕生を中心として

その前と後と区分する紀元法ははこのキリスト教の区分法、つまり歴史思想法を示すものである。基本的にはキリスト教的歴史叙述は時代2分法である。この変形はある。6分法。(この後数行聞き取れず) これにより遠近法が確立された。キリスト教の原像を示すならば、天地想像史、誕生史、キリスト伝記、等など。

Rankeに次の言葉がある。「Jede Epoche ist unmittelbar zu Gott. あらゆる時代は神に直結する。」これはRankeの『世界史概説』(岩波文庫)で述べられている。ランケの神はランケの歴史神学にとってはキリストの出現は決定的な役割を果たしていない。この背後にはランケ独得の神学が存在する。ヨーロッパの学問には神学的前提がある。これは自然科学についてもそうである。ヨーロッパというものはキリスト教を抜いては考えられない。中世と近代の断絶が通念であるが、この人為的分割は分割は所詮人間の為したことである。 中世+近代=ヨーロッパ

第2章 中世的歴史思想の展開

代表的な歴史家を通して考察を加えていきたい。ここで述べるのはAugustinusとJoachimである。Augustinusは広く知られているがJoachimは余り知られていない。この二人を通して中世的歴史思想の展開を試みてみたい。言ってみれば、Augustinusは正統であり、Joachimはキリスト教にとって異端であります。それから、後世に与える影響を思うとAugustinusは啓蒙思想との関連において、Joachimはルネサンス歴史思想との関連において重要である。

1. Augustinus(354-430)

その歴史思想を取り上げるにはかれの「神国論」が中心となる。Augustinusの「神国論 De civitate Dei contra paganos」は413-426年に亘ってAugustinusの59-72才の時に書かれたもので、そのときのキリスト教思想を示すものとされている。これは古代の末期の危機意識のもとに書かれた本来は護教論つまり、異教徒を？して神の国を述べたものであった。キリスト教の歴史観の関連でこの本を考察したい。

Augustinusはこの神国論において人類の歴史を神の国と地の国との2つの支配の対立闘争の場としてとらえ、両者の闘争は地の国の滅亡するまでは終わらないものであり、人類の歴史の究極の目標は神の摂理に基づく神の国の勝利であると解しているものである。Augustinusのこの本で見るべきものは目標を持つ対立概念である。

1) 人類の歴史は神の摂理という人間の意志を越えた因子により、また、神の国と地の国との対立闘争という規則的形式に従って神の国の勝利という目標に向かって進んでいった。ここで述べたことは極めて重要であるものを含んでいる。ここには神の摂理とか日本人には慣れないものがあるがそれらを取り除いてみると歴史は人間の意志を越えた factor により規則的形式によって究極の目標に向かって進むことが説かれている。ここにはキリスト教を否定した歴史哲学にも継承される歴史観を含んでいる。

歴史哲学は歴史学(philosophie de l'histoire)の所産である。フランス啓蒙主義のボルテール Voltaire が1756に初めて用いたものであった。このVoltaireにおいて歴史は理性と非理性との対立闘争としてとらえられており究極目標は進歩の理念に基づく理性の勝利としてとらえられている。Voltaireの歴史のとらえかたはAugustinusの神の国と地の国を理性と非理性また、目標を進歩と置き換えればVoltaireそのものである。啓蒙主義はキリスト教を否定(理念としての否定)した歴史哲学であるが思考形式はAugustinusを継承している。この対立概念を別のものに置き換えると19世紀における歴史観が出てくる。それは何でしょう。誰もが知っている有名な概念です。ここは答を出さずに諸君に考えていただくことにしましょう。

前期3日目 第2限

2) 原理としての対立概念

Augustinusにおいて注意すべきは彼の言う神の国と地の国はよく目に見える教会やや国家と解されているがそうではない。具体的なものではなく、対立する2つの原理を指すのである。換言するならば、人類の歴史は信仰と不信仰の対としてとらえられており、世俗的な歴史は彼の特別な関心を引くものではなかった。つまり、Augustinusの歴史は歴史哲学というよりは歴史神学であり、歴史哲学というものは近代において歴史神学を否定したところに成立したものである。歴史哲学は歴史的所産であり、歴史神学を否定するところに成立し、しかも、その思考形式を継承したものである。

3) Augustinusの時代区分

Augustinus は人類の歴史を六つの時代に区分し各々を人間の生涯に対比させている。

- a. 幼年期でアダムからノアの洪水まで
- b. 少年期でノアからアブラハムの時代まで
- c. 青年期でアブラハムからダビデの時代まで
- d. 壮年期でダビデからバビロン捕囚まで
- e. 中年期でバビロン捕囚からキリストの生誕まで
- f. 老年期でキリストの生誕から最後の審判まで

これは一見すると時代の6分法であるが意味はやはり2分法の変形であり、e. と f. の交わるところキリストの生誕を境にしている。これを次の Joachim と比較してみよう。

2. Joachim de Fiore(フィオレ出身のヨアキム) c.1145-1202

中世的歴史思想の圏内にありながらも、在来の教会の見解と対立し、教会内部に論争を起こさせ、異端とされた。12C の歴史思想家である。12C は歴史学において重要な時期であり、12C ルネサンス（現代ヨーロッパの原型ができる）の歴史思想家で重要である。

彼の時代区分の思想

先ず、Joachim は三位一体論に基づいて歴史の象徴的な時代区分を試みている。三位の位は位格の意で、一体の体は実体の体である。この三位一体論の教義は「父なる神、子たるキリスト、それに聖霊」（それぞれ固有の働き固有の働きの主体としては三つであるが、実体としては一つである。）これが三つの異なった時代に展開する。

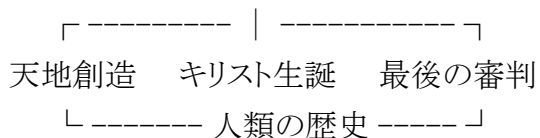
1父の時代 つまり、旧約の立法の時代

2子の時代 新約の福音の時代

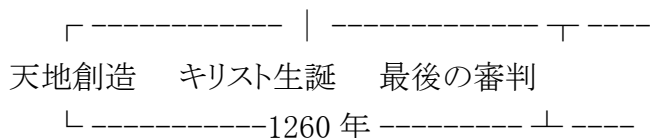
3聖霊の時代 永遠の福音の時代

これは大変な意味を持つ。何故か。これは中世思想の圏内にある。在来の二分ではなく、三分を意味する。

Augustinus においては世の終末は歴史の領域の中にはいれなかった。



Joachim は世の終末は歴史の領域の中に定め、しかも、それを 1260 年と算定した。だ
びでからイエスまで 42 世代× 30（1世代）から算出。



第三の時代は教会ではなく、修道院の時代であるとした。新しい共同体の時代であり、

精霊に満たされた時代である。フランスの Francesco を指導者として（キリスト教の内面を
実現化した）清貧に徹して世俗化した教会を批判した。この Francesco に影響を与えた。

（Dante の新生 Vita Nova は単に新しい生ではなく、正に精霊を指していた。）

Joachim の歴史神学は Augustinus においては未来における新時代の設定は欠如してい
る。第6の時代は老年期で終わりを待つだけである。しかし、Joachim は未来なき終末論で
はなく、未来を認めた終末論であった。ヨーロッパにおいてはマルクス主義が現れるまでは
ヨーロッパで最も影響を与えたのは Joachim である。新しい根本的な性格の異なる時代が
出現するという理念を告知したのである。（修道的理想主義）既存の社会秩序を克服する萌
芽となった。以下三点に ...?

1. 新しさ novitas が初めて積極的な意味を獲得した。これは極めて重要な転換である。
中世的思考では旧きものが正しきもの、良きものであった。これに対して新しいものが良い
という意味を獲得したのである。ここに、新しいという積極的な意味を持つのである。正しい、
悪いではない。

2. Joachim はルネサンス時代の中世思想の先駆である。ルネサンス時代の中間的時代とい
う思想の先駆である。Augustinus の歴史は ... 図 ... に力点があったが、Joachim は ... 図 ... こ
この中間時代つまり、中世は軽蔑され、克服されるべき名称として用いたのである。時代の3
区分法は異端者の信仰に根ざす。

3. 同時にまた、精霊による魂の革新の主張は後のルネサンス及び、宗教改革の源泉とし
て中世末期の特筆すべき意義を持つ。ダンテはこの影響を受ける。正しく、これ 12 世紀
末期の歴史思想である。

過去の人間は過去の言葉を用いて何かを言わんとしている。その言葉の背後にある魂を
把握する。これが肝要である。君達の言葉が何千年経ったとき、その時「古くさい」「何を言っ
ている」と言われたら諸君は反発するであろう。魂を把握していないからである。魂が魂を
把握する。言葉の揚げ足をとっているだけではない。

前期 3 日目 第三限

中世の歴史思想の補論として最後を締めくくりたい。これまで述べてきたように、キリスト
教の時代区分は2分法であった。3分法はルネサンスの所産である。即ち、古代の時代区
分は中世とも関連があるのでこれを述べておく。

古代末期から中世を通じて試みられた時代区分はキリスト教的時代区分法時代区分法と
並んで4大世界帝国史観 ...?....

典型的なキリスト教的歴史像は先述した通りであるが、それと並んで4大世界帝国史観が
あり、これはどこに発するかといえばダニエル書（旧約）の注解において（4,5C A.D）成
立したものである。これはダニエルの注解なのでダニエル書の時代区分思想 BC2 世紀に
遡るが、これは更に古代オリエントにまで遡る。これは時代4分法である。従って、この4
大世界帝国史観を話をするためには古代オリエントの時代区分から説明していかなければなら

ない。

古代オリエントの時代区分は時代4分法であり、まず、バビロニアにおいては春夏秋冬の四季の変遷に応ずる植物の葉の色の変化はそれぞれ世界の4つの時代を象徴するものと考えられた。つまり、時代4分法。これはペルシアにおいても同じく見られるもので Zoroaster（これはニーチェのツァラトゥストラの独語読みである）、金銀銅鉄の4つの枝を持った樹木によった4つの時代区分で、この4つの金属の色は先に述べた植物に応じるものである。古代オリエントにおけるものは花、金属により象徴された4つの時代区分であり、これがギリシアに影響したのが Hesiodos の時代区分である。この Hesiodos は Homeros に次ぐ古い詩人で Homeros と並ぶ詩人で Homeros と対照される？農民詩人である。Homeros の叙事詩は貴族社会を描いている。これに対して Hesiodos の『労働と日々』は当時の農民の生活を描いている。この Hesiodos は「労働と日々」において時代区分を試みている。Hesiodos は時代を、金、銀、銅、英雄、鉄と5つに区分している。英雄時代の挿入を除いては先の古代オリエントの時代区分の変形である。しかも、Hesiodos において金属の順番が価値の序列を持っている。人間の歴史は初めは幸せであったが次第に下降していく。時代下降思想の象徴である（日本でも黄金時代という言葉は存在する）。この英雄の時代は半ば神であり（半神）、福音（者？）の島々において幸福な生活を続けるというものであり、これは別個の思想体系である。この Herodotos の時代は時代下降思想と福者の島々つまり、ユートピアの思想を組み合わせたものである。

ローマにおいても同様である。古代ローマにおいても Ovidius（有名なローマの詩人）もこの金銀銅鉄を用いており、これも古代オリエントに発するものであった。つまり、古代は Hesiodos、Ovidius など歴史家以外の人間により時代区分が試みられている。Daniel 書（B.C2C）のもつ時代区分の意味が分かるであろう。Daniel 書は B.C2C のユダヤ文学の最初の黙示（啓示）文学である。B.C2C はヘレニズム時代であるからヘレニズム国家の一つがパレスチナを支配しユダヤのギリシア化を行ったのであるが、ユダヤ人がその宗教的自覚を強調した Daniel 書がユダヤ文学の代表作となったのである。ダニエル書は人名か何か判明していない。その中には最後の審判に至るものが象徴的に時代区分されている。ネブカドネザル（新バビロニアの王）の夢に巨像が現れてそれが崩壊する有名な話があった。この巨像が金銀銅鉄によってできたものであった。この夢を説いた（解いた？）のがダニエルの書なのである。つまり、ダニエルは古代における4大国家の推移が告げられたものであり、またそれにより、王の運命が象徴されたものである。この金銀銅鉄の巨像はオリエントの時代区分と関連しており、ダニエルの時代区分もオリエントに由来する。このダニエルの時代区分を発展させたのが Hieronymus の Daniel 書注解である。この Hieronymus は 4C-5C の人で有名である。

当時、Augustinus と交際があり、Bible のラテン語訳 (Vulgata) を行った。この Daniel 書注解においては金銀銅鉄の巨像がバビロニア、ペルシア、マケドニア、ローマの4大国家に当てはめられ、ローマ帝国崩壊後もなおローマの継続ないしローマの復活が信じられて

近代に入ってなお影響を残したのである。4大帝国史観はダニエル書によって立てられ、古くオリエントにまで遡り、近世に至るまで影響を与えた。中世において何故故に復活せねばならなかったか。これが一つの手がかりである。ローマ理念の伝統と問題。永遠の都ローマ。...ヨーロッパにおいては時代区分といえば時代4分法、中世キリスト教の時代2分法、ルネサンスにおいて確立する時代3分法。これは人間が区分したのであるから、「どの様に区分したのであるか」は何故によってであるか。古代、中世、近代。区分の基準がある。基準とする思想がある。時代区分思想をなすものである。

第3章 中世における歴史研究の方法

キリスト教的歴史観ははたして中世の歴史叙述を制覇しているかといえば必ずしもそうではない。これの...筆録できず。

中世の歴史意識はいわば、理想主義と写実主義の2つの原理がみられるもので理想主義は実は先ほど述べた Augustinus の歴史神学に典型的に現れている。写実主義を典型的に現しているものは annales (年表 年表と言っても事件を年ごとに記入する) である。この起源も問題となるがこの annales は年ごとの出来事をただそのまま記入する。この筆者は自らが体験見聞した事件や他人の目撃したものをそのまま述べていく。だから、その筆者自身が生きているその地方史であり現代史である。歴史神学は天地創造から最後の審判に至っている。これは非歴史的な歴史像であるが (参照 ; Augustinus の神学史)、この annales は現代史である。

理想主義 歴史神学 Augustinus

写実主義 Annales

この二つが相成って Chronica mundi (世界年代記) を形成している。

中世キリスト教文化が哲学はスコラ、美はゴシック、歴史は chronica に現されていると言って良い。キリスト教的理想主義と写実主義の融合をするか否かである。(?)

chronica は bible などの引用抜粋であり、量は膨大であるが、質は無味乾燥である。しかし、筆者の生きている時代のものは狭い地方のものであるが、生き生きとしている。つまり、神学歴史と現代史が分裂している。しかも、中世の年代記には筆者の生きている時代に詳しいものである。Gregorius(6C) の通例「フランク史」と呼ばれるもの、これはガリアの歴史を調べるとき重要。これは世界年代記の一つである。これは天地創造から始まるが、これは第一巻にとどまり、全十巻の内三分の二が現代史である。これは名目は世界年代記であるが、実質はフランク現代史である。だからこそ、当時のガリアの不可欠な資料である。当時の歴史研究の方法と関連するものである。

中世における歴史の定義は Isidorus de Sevilla (セヴィラ出身のイシドールス) 6-7C の人

であるが、その著作の語げん（？）の中でこれは一種の百科事典であるが、「歴史はなされたこのと記述¹⁾で、それによって過去に行われたことが認識される。我々は耳で聞くものよりも眼で見るものの方をよりよく理解する。²⁾つまり、見たものは偽り無しに伝えられる。」

¹⁾ キケロの *Historia* の古典的定義であった。

²⁾ 歴史叙述の上で見ること、目撃の重要性を重視している。中世の歴史の目撃体験を重視したことは Einhard(8-9C) の「カール大帝伝」の中で Einhard は「私が自ら関係し、この眼で見て確かめたことは、誰も私以上に正確に書くことはできない。」と述べている。中世の歴史叙述は目撃体験が研究方法であって現代史において初めて可能であった。書かれた資料をも用いたであろうがこれを用いたときは無批判に盲従した。何故なら中世は書物は少なく、bible や教父の作品は権威を持っており、ラテン語は特別の地位を持っており、書物が少ないせいか、書かれた作品に対しては尊敬、信頼しており、批判が生じ難い状況であった。

目撃を重要視したのはギリシアと共通である。古文書学成立までは (Mabillon 18C の古文書学)、19C になってランケが資料批判的方法で今日の歴史叙述 ... 聞き取れず。

西洋において歴史叙述の伝統は目撃を重視したものであった。現代史が西洋史の伝統であった。

以上 前期「西洋歴史思想の展開」第一部 古代・中世 終わり

西洋歴史思想の展開

第三部 近世・近代

岸田達也

1982.12.12-14 皇學館大學 224 号室

後期第1限 第1日目

第1章 西洋近代 自然と歴史に関する構想

後期は西洋近代に入る。自然と歴史に関する構想について述べてみたい。前期に話を

したことが形を変えて後期にも出てくる。前期は時間と歴史に関するギリシアとキリスト教であり、形は異なるが共通のテーマを持つものである。西洋近代を特徴づけるものは何か。この講義では私は自然科学の成立と発展特徴づけるものとしてとらえたい。近代自然科学と近代歴史学の成立との関連について述べる。

これは講義が展開するにつれて明らかになる。自然科学の成立は単に一つの学問が成立したに留まらず、ヨーロッパの精神史の確立として捕らえたい。単なる科学史とは異なるものであり... (聞き取れず)。

初めに、述べたいことはこれからの講義の根底を貫いているもの、自然科学と歴史以外の問題も述べておきたい。

ルネサンスの時代区分の思想

時代区分の問題については前期の最後に話をしたが、時代区分4分法である。古代オリエントに発する分割法である。これは4大帝国史観を含む。これらは古代の時代区分思想の問題。次は時代2分法。原始キリスト教に発する時代区分である。また、ヨアキムの時代3分法についても述べた。この3分法が確立するのはルネサンスである(12C)。ルネサンスの時代区分法の先駆をなすものである。時代区分には区分の基準、区分の思想がある。ふつう時代区分は言われているが、それは単なる区分である。私は区分思想を考えたい。区分するのは人間であり、時代が最初から区分されているのではないからである。

時代3分法 ルネサンスは何かと言うと時代を古代、中世、近代と分ける方法である。この分け方はルネサンスに起こり、ヒューマニストの理念を根底として成立した。一定の時期の一定の歴史的所産である。先述したように先駆はあるが、3分法はルネサンスである。では、ヒューマニストの理念とは何か。区分基準は何か。ヒューマニストと言うと広くは人間性の探求者である。狭義では古典文献学者であり、特にラテン系の文献学者であり、古典に熱狂しており、北方のゲルマンには嫌悪を抱いていた。彼らによると古典はゲルマンにより破壊され、一千年後のルネサンスのヒューマニスト達によって復活したと考えた。ヒューマニスト達にとっては、ゲルマンは蛮族であり、非文化的な民族であった。つまり、歴史は古典のあった時代、古典の非存在の時代、古典の復活した時代と分類した。つまり、古典を基準とした3分法が成立した。

ルネサンスの意識には価値の序列があった。ヒューマニストにあつては古代は古典のあつた高貴な文化であった。ヒューマニストの時代は古代の教養や芸術の復活した時代でこれは第2位の時代であった。それに彼らと直結する時代は古代と彼らの時代の間介在する時代、中間の時代であつて、無知野蛮な暗黒の時代であった。劣等な時代である。中世はヒューマニストの言葉である。今日でも中世は暗黒時代であるという通念は残っているが、これはここに発する。価値の序列が存在した。もとより、価値の序列の変動はヨーロッパお精神史において生じる。これは精神史の重要なテーマである。今は一言で言えば、17Cに入つて古代派と近代派との論争が生じる。古代と近代とはいずれが優れているか。

これはこれで有名な論争である。これは近代派が勝利を納める。それとドイツロマン主義これは.. ? ..に発するが、ドイツロマン主義は卑しめられ、おとしめられた中世の復権を計る。これがロマン主義の論争である。これはいわゆるカタテオレンセオリー？（日本語では「古代没落説」、catastrophy）と言われる。

古代没落説とその批判

断絶 (catastrophy)、古代と中世の間には catastroph がある。また、中世と近代は断絶がある。これはルネサンスに発してフランスの啓蒙思想により拡大されて 19C 末までヨーロッパを風靡した。ボルテールや...?... はゲルマン嫌いであった。ルネサンスのヒューマニストの意識においてこのように考えられたものであって、実際はどうであったかはまた別である。20C 近代歴史学はこの断絶の批判である。古代没落説の要点は簡潔に述べると3つある。

1. 古典文化 古代社会は繁栄状態のまま突如没落したのである。
2. 没落はゲルマン民族という蛮族の武力的侵入により破壊された。
3. 古代と中世 中世と近代の間には断絶が存在する。つまり、近代は中世につながらずして直接古代につながる。

しかし、この3点にわたって修正批判したのが...?... であった（ゲルマンによる近代歴史学であった。：永田）。つまり、1については古典文化は内面的に既に衰えていて、次第に。また、2のゲルマンは本当に蛮族であったか。また、3については、近代はむしろ中世から生じたのではないか。これらについては実証的また緻密な研究がなされた。これらについては詳細には述べられないが学者の名前は挙げておく。

オーストリア Dopsch 「ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎」 創文社
ベルギー Pirenne 「マホメットとシャルルマーニュ」(ヨーロッパ社会の誕生)

中世と近代のつながりを述べたものには

オランダ ホイジンガー 「中世の秋」

ドイツ ブルダッハ 「宗教改革・ルネサンス・人文主義」

私がこれらの学者の名を知ったのは 40 年前3高歴史の時間に聴いた。このころは翻訳はなかった。昭和 16 年で日本は大戦直前である。その頃は原典からしか読めなかった。歴史は歴史家を通して歴史研究に入っていく。これは一つの重要な道である。3大歴史家 ドプシュ Dopsch、ピレンヌ Pirenne、マイネッケ。私はマイネッケの「近代史における国家理性の理念」を翻訳した。

3分法の成立はヒューマニストの意識において成立した虚像であって実際の実像ではなく、いわば学問以前の独断であって 20C の学問的歴史研究によって実証批判されなくてはならなかった。

ルネサンスと宗教改革

ルネサンスをどの様に考えるか。通例、ルネサンスと Reformation は別のものと考えられ

ている。文芸復興と宗教改革。これは実は文芸復興という訳語自体が、つまり古典の復活というものがあればこそ、カタテオレンセオリーがあればこそその訳語である。ルネサンスと Reformation は origin においては別のものではなく、一つのものである。ヨーロッパの審美的 ...?... に起源をもつ。

ルネサンスの語源を見てみると renasi (再生)、reformatio (更新) である。この言葉は魂の革新の意味を持つものであり、後者 Reformation の語源は reformatio (再形成) であり、これは宗教の改革ではなく、人間自体の改革つまり、魂の革新を意味したのである。

これらはいずれも一つの動機であって前期のヨアキムのところで述べたものと関連する。精霊による魂の革新は中世のヨーロッパの精神史に重要な意味を持ったが、ここでもそれが言える。Bonaventura ボナヴェントゥーラ (13c フランチェスコ会長) はヨアキムに影響を受けたが ...?...。Reformatio anima (靈魂) 靈魂の再形成。靈魂というものは神によって神の御姿に似せて作られている靈魂は罪によって見ぬくなくなった。これは再形成されて神の姿に復帰できるし、また復帰しなくてはならない。狭い意味で教会の改革ではない。

つまり、起源においては一つの運動である。ルネサンス (世俗) と Reformation が分岐しはじめる。これは 13C ダンテの頃である (Vita Nova 再生。ヨアキムの影響を受けたもの)。

新しい人間観。中世末期の神秘的なヒューマニズムが人々の眼を古典に向けた。つまり、古典は新たなる眼をもって見られるようになった。古典そのものが復活したのではなくて、人間の態度が変化をして古典を見た。古典は中世でも存在した。名題集が教会や修道院のテキストとして存在した。しかし、その解釈は在来のものであった。しかし、いま、古典は新しい眼をもって新しく認識されたのである。新しく発見されたり、復活したのではないのである。人間の発見なのである (ブルクハルト)。諸君の生まれる前より古典は存在している。それに眼を向けるか否かである。「古代は中世につながらずして近代に繋がる」のではなく、正に近代は中世から発している。ルネサンスは中世の中から発したものであり、ヒューマニストは中世に背をむけており、主観的には否定していた。つまり、「古代は中世につながらずして近代に繋がる」はヒューマニスト達の意識において述べられただけのものである。いわゆる中世、いわゆる近代の共存の時代である。「いわゆる中世+いわゆる近世=ヨーロッパ」ヨーロッパは中世を理解せずして理解できず。この点に関して既に 19C の大歴史家ランケが ...?...。(Ranke: 「世界史概観」)

ヨーロッパとは何か

ランケの近代は今日の近代ではなく、いわゆる近代あわゆる中世の合した時代を述べているのである。ランケのローマ風ゲルマン世界がヨーロッパ世界であった。ランケは地中海世界とヨーロッパ世界という時代2分法をだした。ランケの世界はヨーロッパ世界史であるから地中海世界とヨーロッパ世界の歴史である。ランケの言うところは今日も生きているのである。つまり、従来の古代・中世・近代という区分ではヨーロッパは理解できない。断絶があるから。これらを一つのものとしてヨーロッパを理解する。ギリシア文明とヨーロッパ文明と

は異質なものである。ヨーロッパは単なるギリシア古典文明の受容者ではない。時代3分法ではヨーロッパは古典文明の単なる受容者である。価値基準は古典文明であるから中世は野蛮な時代である。軽蔑の別称であり、差別の言葉である「ゴシック」も「粗野な、野蛮な」の意味である。古典建築が優れているのであって、中世の建築は野蛮粗野なものであるという意味である。

ヨーロッパ文明は古典の影響を受けながら「ローマ風・ゲルマン風＋キリスト教」として成立した。これは古典文明とは異質である。ヨーロッパは単なる古典文明の利用・受容ではなく、それ自体個性を有した文明である。ヨーロッパは一つのまとまった世界。一つの個性ある文明であることは「古代→中世→近代」からは出てこない。いわゆる古代、いわゆる近代として見たとき初めて出てくる概念である。相対化、ヨーロッパ中心主義ではなく、世界の中の一つの文明として捉える。価値基準がギリシアにある限り、この相対化は出てこない。従来の時代3分法を20C近代歴史学は修正したが問題があるのである。

Halecki ハレツキ（オランダ）の「ヨーロッパ史の限界と区分」。翻訳はまだ出ていないが出るであろう。地中海時代→ヨーロッパ時代→大西洋時代。地中海時代・ヨーロッパ時代という言い方はハレツキの初めての時代区分法である。ヨーロッパの没落は言われて久しいがヨーロッパ中心主義の時代は過ぎ去った。この根底にあるのはハレツキの区分思想である。戦後、3大区分の批判の一つである。Barraclough（英）「転換期の歴史」これは3分法に対する批判が述べられている。

私の言いたいことは「いわゆる中世＋いわゆる近代＝ヨーロッパ」であり、後期の講義の最初にこれを述べておきたい。

第1日目 第2限

（後期第1日は永田が岸田教授の講義に出席できなかったため、妻に託してテープレコーダーで記録を残した。しかし、あろうことかこの2限目は機械が作動せず、妻の残した概略のメモしかないため講義の詳細は不明である。）

第2章 科学革命と史学革命

1. 革命の意味

17世紀科学革命は有名であるが、史学革命は余り知られていない。史学革命に関する日本語文献もない。どういう学問的分野に関心をもつかという学問的活動の内容が問題。

17世紀において自然に関する方法論が確立して自然科学が確立された。(古代においては学問としては自然科学は確立していない。)歴史学は18-19世紀に方法論が確立することによって成立した。

17世紀に科学は絶頂に達し、伝統的な自然観を変革した。これは単なる自然観の変化ではなく、精神的現象である。科学革命は2大文明に比してもっと重要なものであり、科学史の枠を越えたものがある。ヨーロッパ精神史の問題である。

第二次世界大戦後、この科学は注目され、近代史の教授 Butterfield (ケンブリッジ大の人で「近代科学の起源」、「イギリス史」の著書)は中世における古典古代に関する関心が復活する前後の現象であると言っている。中世文化史はルネサンスの繰り返しである。オットー・ルネサンス、12世紀ルネサンス、13-16世紀ルネサンスで最後のものがイタリアルネサンスである。ホイジンガーの「中世の秋」がよく捉えている。ルネサンスは西洋キリスト教改革に過ぎない。

Barracough バラクラフ (英)は「転換期の歴史」(1955)で中世概念の批判を試みた。これは3分法の批判でもある。また、「文明にとっての変革期」(1977)ではヨーロッパ史の転換期を12と17世紀とみている。12世紀の転換期とは12世紀ルネサンスと呼ばれた時期であり、叙任権闘争が起きている。ヨーロッパの問題としている。なお、バラクラフには「現代史序説」(岩波)がある。

2. 科学革命

科学革命の原語は Revolution であり、大文字である。

科学革命に関する入門的参考書を紹介しておく。

* Kuhn クーン「科学革命の構造」(1961)は問題提起の本として有名である。Scientific revolutions に見るように revolutions は小文字であり、複数形である。つまり、複数の革命であり、歴史的プロセスに対してではない。paradym (パラダイム:思考の枠組み)の転換に対してこのことを用いている。1960年代はクーンらの科学哲学が転換する時期である。クーンの問題提起は科学哲学の転換である。

* Butterfield「近代科学のあゆみ」Butterfieldの講演したもの。「Whig 史観」(講談社学術文庫)バターフィールドが戦間期にかいたもの。

3. 史学革命

史学革命の原語は Historiographic これはバターフィールドが問題にした。(1960)

1) 国際歴史学会議で「歴史叙述の歴史」を報告した。

2) 「Man on his Past」(1959? 初版)という論文集を出している。これは戦後ヨーロッパにおける史学思想史であり重要な著作であるが、邦訳はない。

1) 歴史叙述の歴史の中で述べている。「自然科学の...?... 西洋は古代ギリシアや古代中

国が思いもよらなかった進歩を成し遂げた。また、西洋は歴史叙述や歴史的思考を発展させた点においても無類の業績を残している。これら2つの業績はいずれもここ300年のことである。我々が我々自身の知的世界を理解しなければならない場合には歴史思想も科学思想もいずれも研究されねばならない。この意味において史学革命の研究は科学革命の研究と相並ぶものと言える。」

2) 「Man on his Past」の序文で述べている文章。「我々は我々の文明の性格と発展を理解したいときには自然科学の歴史を研究しなければならないということは久しい以前から悟るようになってきた。しかし、我々は歴史叙述の歴史の重要性を悟るといふ点でははるかにたち遅れている。」日本ではなおさらにたち遅れている。問題意識と内容が違っていたら史学思想史は違ってくる。バターフィールドの根底の問題は1) 世界史研究のもっとも興味ある問題の一つは中国の歴史叙述の巨大な発展が何故西洋のそれとは異なる道を探ったか。ヨーロッパ文明と中国文明の歴史を問題にした。これは比較思想である。中国の歴史叙述はプラグマつまり、原因と結果を整理して考えることが欠けている。中心をなすものは18-19世紀前半の近代歴史学の成立についてである。

近代歴史学の成立の根拠

資料批判的方法 (Historismus 歴史主義)

方法を背後においている思想的根拠がないとダメ。近代歴史学は方法的根拠を思想的根拠とが同居している。

数学的・実験的方法——方法的根拠

Naturalismus (自然主義) ——思想史的根拠

*Troeltsch トレーチュ 「キリスト教会の社会倫理」 1922

H11.3.4 賢島に帰省す。

第一日 第3限

第3章 科学革命の思想的遺産

第1節 方法論的根拠

これからしばらく明日にわたって科学革命の遺産について話すが、何も知らない者にとっては歴史思想と無縁のことを話すように思われるであろうが、これは緊密に関係するものである。

1. 方法的根拠

ベーコン: 経験的帰納法

デカルト：観念的演繹法

近代というものはある意味では中世の解体である。中世の統一文化が解体するところに近代が誕生する。この中世的世界観における位階秩序の問題。どういう事かと言うと、中世においてはすべては神に帰属せしめられ、神中心主義で世界構造の体系の把握が試みられた。即ち、神・人間・自然は自然を底面とし、神を頂点として人間が中間に存在した位階秩序があった。人間は神のために、また自然は人間のために存在した。この神・人間・自然の system は具体的な歴史家の思想は、例えば、ダンテによると神の下に天使がいて、これが9つの位階に配され、9つの天球を支配しているとか、鉱物・植物・動物とか、またこの動物が更に鳥・獣・魚の3つに分かれている。今はこれらの種々の細かなことを取り外して簡潔にすれば、神・人間・自然となる。これは後にもしばしば出てくる図式で、簡潔ではあるが、このものの持つ意味は深い。西洋の思想はこの神・人間・自然の3つを巡って展開するものである。

近代というものは中世の解体であるから、神・人間・自然の図式の解体であり、つまり、人間の探求はルネサンス、神の探求それは Reformation、最後の自然の探求は科学革命である。このさきの2つはよく言われるが、最後の自然の探求：科学革命は問題にされなかった。私が問題にしたいのはこの自然である。人間による自然の支配が方法的に確立したのは 17C の自然科学革命の確立である。自然の方法は本来2つの方法の合したものである。即ちその一つを経験的帰納的方法でこれを樹立したのがベーコン（英）であった。今一つは観念的演繹的立場でそれを樹立したのがデカルト（仏）である。

ベーコンには「Novum Organum 新機関」、新しい道具という意味。アリストテレスの Organum に対する題名である。デカルトの特に有名なものは「方法序説」。これはデカルトの方法的自叙伝である。デカルトは近代ヨーロッパの源流、根底である。哲学の本を仏語で書いた最初の本である。

先ず、ベーコンの方法は実験的方法で経験的事実を収集分析してそこに得られた事実を実験的に検証することにより、自然の構造を明らかにしようとする実験的方法である。これら近代の実験精神の自覚したものである。しかし、ベーコンは数学の意義を悟らなかった。一方、デカルトのほうは数学的方法である。基礎的原理から数学的精神を構成しようとする方法。これは数学精神を自覚はするが、実験的意義を理解しなかった。

この2つのものは相補的なものである。この2つのものを合したものはガリレオの数学的実験的方法である。ガリレオの数学的実験的方法を一語で言えば、ガリレオの方法は「自然現象を理解する方法は対象を単純な諸要素に分析して、それら諸要素の間に構成される数学的関係を仮説として、そこから演繹される理論的結果を実験的に検証しようとするものである。」

これを今、ガリレオ自身の言葉で言えば、「分解的方法」と「合成的方法」。ガリレオの分解的方法とは現象を分析して数量的に取り扱えるような要素に還元すること。また、合成的方法とはそれら諸要素を数学的方法によって結び付けそれを実験により確かめる方法である。

これは実は今日においてもそうであるが、科学的探求の方法のモデルである。科学と言ってもそれは何か。それは今日、仮説演繹法である。では仮説演繹法とは何であるか。探求しようとする問題に仮説を立てて、推論の結果の検証を通して仮説の真偽を検証する方法である。これはガリレオの方法である。ガリレオの方法は今日の科学的方法の源流となるものである。「新科学対話」

昭和16年私の思い出がデカルトの方法序説にある。文乙（独）時代のことである。伊吹武彦（独文学）を中心として原文で講読したことがある。私が18・9才の頃。朝の1限の前に単位もないのにである。暖房の無い、冬の日であった。しかも、戦争が始まっても行われた。

この数学的・実験的方法。これは実は本来、結び付かざるものが結び付いたのである。これは結び付けられたのであるこれは学問理念の変革である。ヨーロッパの学問伝統の問題がある。何ゆえ結び付かなかったか。何ゆえ結び付いたか。

科学の歴史的な根源は職人的伝統と学問的伝統。職人的伝統は手の技術。学問的伝統は頭脳の技術。手と頭。西洋においては本来結び付かないものであった。Artes libera-
lis 自由学科。頭の労働。知的労働。何から自由か。それは肉体労働から。自由人の基本的教養であって17課。これは大きく分かれる。

論理的3学科。文法、修辞法、弁証法（論理学）

自然科学的4学科。天文学、幾何学、算術、音楽。

Artes liberalis に対して Artes mechanicae これは機械的技術と訳されることもあるが、これは手の技術を意味し、物理はガリレオ以後のことであるから手の技術である。これは肉体労働であり、下賤な者の仕事であった。今日の工学や農学はこれに属する。

航行、狩猟、農耕、機械、建築、外科医術、演劇などである。音楽は高度であり、演劇は下賤なものであった。外科医術は今日では下賤なものではないが、当時においては理髪医であった。これは職人に属するものであった。西洋の学問伝統においてはこの2つの系統があった。論理が西洋では支配的な位置を占めていた。後のものは正しく、美しく、説得ある言論が重要視され、論理が重要であった。歴史。これはないのである。中国において史の占める位置は高く、ギリシアにおいて Historia の占める位置は低かった。歴史は修辞法、文法に属し、その下位に置かれたのである。

西洋においては Artes mechanicae を蔑視して軽蔑する。頭と手は本来結び付かないものであった。今日、工学、農学は下船と思わない。これは学問的伝統の変革があったらばこそである。ガリレオはベネチアの職人の仕事の中に力学のヒントがあると「新科学対話」の最初に述べている。ガリレオは職人を軽蔑していない。

工学部は今日、日本は大学に入っているが、工学が起こったのはイギリス産業革命の後である。ドイツは工学は総合大学の中には入らないものであった。単科大学としてしか最近までは存在しなかった。学問理念、学問思想の変革があったからである。

科学と芸術

近代科学の成立は芸術理念の変革をもたらした。科学と芸術。これは一見無関係に思われるが、そうではない。

レオナルド・ダ・ヴィンチ。画家、天才と言われているが、近代科学者の prototype 原型である。ダヴィンチは絵画術のヴェロッキオのところに弟子入りする。絵画術、これは手の技術つまり、職人である。artist ではなく、artizan であった。職人は下賤なものであった。ダヴィンチは数学に関心を持ち、それを絵画に応用したのであり、数学と技術の総合である。ダヴィンチは解剖学もやった。これは画家の科学である。「最後の晩餐」はダヴィンチのルネサンス絵画理論を凝縮したものであり、透視画法を応用したもので遠近法と比例を結合させたところに「美」をもたらした。絵画の数学的操作である。近代科学者の prototype ダヴィンチを示しているものである。ダヴィンチを代表する芸術家は絵画を Scientia (科学) だと主張し、数学を主とする芸術であるとした。

当時フィレンツェに美術学校(Academia)が創立された。これは大変な事件である。つまり、絵画はもはや Artes mechanicae ではなく、Artes liberales である。これはヨーロッパの精神史の変革を促すものであった。芸術家が高貴なものであるという芸術理念の変革であった。手の仕事とされたことは古代ギリシアの模倣とされた。プラトンは芸術はアイデアの模倣の模倣。これに対するアリストテレスの反対論。模倣ではなくして創作。職人より芸術家となったダヴィンチは模倣ではなく創作をしたのである。自然科学の成立は学問、芸術の変革を促した。これは単なる一つの学問の成立に留まらず、ヨーロッパの精神史の問題である。

私は思い出す。児島喜久夫？先生の一つの言葉、「ルネサンスの頃は画家の地位は低かったため、スポンサーの趣味に迎合しなくてはならなかった。そのため、知るべきである。」その通りである。何年かかるか。これが自分で勉強したときにはたと思い当たることがある。

第一日 第4限

第2節 思想的根拠

方法の根底にある思想を問題としたい。近代自然科学は西欧文化圏においてのみ生じた。普通、自然科学と言っているが、西洋近代を前に付けるべきである。西洋近代自然科学。つまり、一定の歴史的所産としての地域・時代の特性があるものである。自然科学は客観・一般普遍と考えられているが、実は、自然科学といえども時代・文化、つまり歴史的制約を免れない。自然科学は西洋の考え方を基本にして初めて成立したのである。全人類史を通じて普遍妥当なものではない。西洋近代自然科学は西洋において誕生したのは根底にキリスト教が存在するからである。いずれも、近代科学革命の遺産として2つが重要である。一つはベーコンの自然支配の理念の確立。2つ目は、デカルトにおける機械論的自然像または世界像の形成。これはベーコンと共に2つの遺産として重要であり、この2つとも根底にキリスト教がある。自然科学の根底にキリスト教が存在する。これは一体何を意味

するか。近代科学はキリスト教的自然観の中に潜在していた潜在的可能性はつきりと取り出してそれを哲学的原理にまで高めたものである。中世のキリスト教の自然観を徹底させたのがデカルトである。いわゆる中世、いわゆる近代の連続したもの。神・人間・自然の位階秩序とその批判。

ギリシアの自然観

中世的世界は神・人間・自然の位階秩序から成っており、自然は人間にとって異質な他者である。これは極めて特長的である。ギリシアの自然観を知っておればこれが分かる。ギリシアの自然観とは何か。これはギリシアにおいてはギリシア語で *physis* 生成である。ラテン語で *natura* 自然、原義は「生まれる」「生じる」。つまり、西洋古典語の原義が示すようにギリシアの自然はそれ自身生まれ、成長し、衰え死ぬものである。アリストテレスは自然はそれ自身の内に運動を持っているものであった。自然そのものが生命を持っている。世界は魂を持ったものである。世界は活ける世界であり、魂を持ったもの。生ける世界である。ギリシアにおいては人間と自然の間に壁が無い。自然は人間に対して異質の他者ではない。同質的に調和している。むしろ、人間は生命を持った自然の一部である。人間と自然の間には断絶が無い。従って、ギリシアにおける認識は自然は人間に深遠な ...?... である。ギリシアの人間は自然を内から捉えられるのである。形相 *aidos* の直感が得られるのである。魂が魂を理解するのである。

キリスト教の自然観

1) ベーコンの自然支配理念の確立

キリスト教においてはギリシアとは異なるのが明瞭である。自然は人間とは異質なため、外から操作するものであって内から理解することはできないのである。外からの操作。これは実験である。カントは後年これを巧みに述べている。「実験は自然を拷問にかけて自然自身に答えさせるものである。」自然は実験を希望はしていない。これをベーコンで言えば、「自然の秘密はあるがままにしておかれるよりも人間の手によってさいなまれた方がその正体を明かし易いものである。」カントもベーコンも同じことを言っている。操作された自然。自然支配の理念がある。これは人が自然を支配すること。キリスト教的自然観が存在する。ベーコンの言葉で「神の贈与によって人類のものとなっている自然の支配権」神・人間・自然の位階秩序。この図式が根底にあれば、こそこの言葉である。ベーコンの自然支配の理念の根底にはキリスト教がある。ベーコンの言葉「光をもたらす実験」この言葉の背後には宗教がある。光の父たる神。実験とは自然に付与した原理原因をを明らかにすることである。実験は宗教的行為。このようにして人間は力を持ち、自然を支配する。

ベーコンは学問の本質を技術による自然の支配に見るとした。自然は神により、人間のために作られたものであり、人間は技術により自然を利用すべきである。この「知は力なり」の図を見ておく。(参照 図『ノヴム・オルガヌム』の扉絵)

バイブルとしての自然

自然の支配を目覚めさせた科学革命であり、その根底にはキリスト教があった。神が失われて process は人間が神の位置に変わる。「聖から俗へ」の転換。しかし、聖の枠組みは不変（普遍？）である。これが実はあの近代における主体と客体という二元論の根底にあるものである。観察する主体と観察される客体である自然。主体と客体。主観と客観。この二元論はヨーロッパ近代の根底にあるもの。近代科学の基本構造であり、また近代哲学の基本構造である。

法則。近代科学の法則。歴史の法則などと言われる法則。どこからこのような考え方が出てきたか。神の法が、自然の法に移行したものである。「自然」というものが神の作ったもの。全知全能の神が作ったもの。完全な形で出来上がっている。つまり、すみずみまで神の決定が及んでいる。一種の決定論である。自然法則は神の決定。神の法が自然の法。神の掟が自然の掟。Lex divina Lex naturae。神の掟が自然の法則。ここから、自然の法則が言われるようになった。自然の法則や歴史の法則は考え方であって有ることが証明さ



『ノヴム・オルガヌム』の扉絵

羅針盤という「知」を得た人は、それまでの沿岸航法から解き放されて遠洋航法に乗り出せるようになった。図の二本の柱はジブラルタル海峡の兩岸にあったとされる二本の柱である。つまり、地中海から大西洋に乗り出していく光景である。「知は力なり」の象徴的挿絵である。

（永田 注）

（岩波文庫「ノヴム・オルガヌム」より）

れたのではない。「自然の法則」という概念も歴史の所産である。自然の法則の探求は彼らにおいては自然に現れた神の栄光を明らかにすることであった。自然はバイブルと並ぶ第2のバイブルである。自然の法則の根底には宗教がある。彼らの言葉を挙げると、ニュートンは普通は近代科学の祖と目されている。宗教とは関係ないと見られている。これは常識である。しかし、実はそうではない。ニュートンにおいては自然の法則を明らかにすることは神の栄光を証明することであった。『自然哲学の数学的原理』の中で目的を言っている。「神への信仰のための原理を与えることに目標がある」と。実に、根底にあるのは宗教である。ガリレイは「神の言葉はバイブルの中に展開されているものと全く等しく自然の中にも展開

されている」と述べている。自然はバイブルと並ぶ第二のバイブルと言ったが、ガリレイはそれを述べている。知られざるニュートン。知られざるガリレイ。近代西洋自然科学に共通する思想は自然研究の目的は神の摂理を明確にすること。神が自然に設定した秩序を明らかにすること。近代科学は神学的背景を持つ。科学と宗教は密接に関係したものである。単なる学問の歴史科学史の枠を越えたヨーロッパ精神史の問題である。

ここまで述べてくればある一つの文献を思い出す。それは何であるか。Weberの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』。これはキリスト教と資本主義の精神。これは結び付かないものであると一般に考えられているものであるが、宗教と経済が密接な関係を持つことを述べたものである。宗教が近代経済の確立の起爆装置となったことを示すものである。このパラドックス。精神のパラドックスを理解しなくてはヨーロッパは理解できない。宗教と経済が問題ならば、宗教と科学も問題にされるべき重要な意味を持つであろう。近代西洋自然科学は一定の歴史的所産である。「中世+近代=ヨーロッパ」が理解されよう。一般常識からすれば、問題にならない問題がある。ここに気づくことが重要である。問題を理解することが大事で、何万人もの人間が同じものを見ている、人の気づかないものを発見する。これだけで大変なことである。自分で問題を発見する。これは見ているだけではダメ。隠された世界がある。

第2日目 第1限

科学革命の思想的根拠についての講義で1. ベーコンの自然支配理念の確立までを述べた。いまから2. デカルトの機械論的世界間の確立について述べる。

2) デカルトの機械論的世界観の確立

このデカルトの機械論的世界像の形成。ベーコンにおける自然支配の根底にはキリスト教があったが、デカルトにおいても同じ。機械論とキリスト教が結合するこのパラドックスについて述べる。

デカルトは心身二元論が彼の特長である。物体をすべて一様な *extens* に還元してそれを専ら形、大きさ、運動からのみ取り扱う。これは何を意味するか。これは人間の生命的要素を欠いた数学的な対象である。デカルトは解析幾何学を大成したが、これに端を発するものが自然の物事を数学的なモデルとして形成された。

物 *extensio* 延長

心 *cogitatio* 思惟 (Cogito ergo sum.)

自然の世界は人間の精神とは独立したものとして存在する。

これは前回の中世的世界観における位階秩序である神・人間・自然に根ざしている。精

神と肉体を本性の異なるものとして区別するものである。魂の不死。これらが根底に存在する。つまり、デカルトには中世の連続を見ることができる。キリスト教において自然は人間にとって異質な他者である。自然は非人間。この非人間化が進むことにより何が起こるか。自然から魂を抜くことである。これらはギリシアの魂を有した自然とは異なる。つまり、数学的分析が出来るようになる。デカルトの自然像はキリスト教の中に暗に含まれていたものを明白にしたものである。キリスト教と機械論との結合がある。このデカルトの背後にはキリスト教がある。『方法序説』の中で「我々自身は自然の主人が主人かつ所有者」の言葉が出てくる。これは神・人間・自然の図式から当然の結論。スコラを思い出させるものである。このようなものがデカルトの発想にあった。scientistの共通するものとして神が自然に設けた法則を明らかにすることである。デカルトは「王が自己の王国に様々な掟を定めるのと同様に、自然の中にこれらの掟を定めたのは神である。」と述べている。lex divina. lex naturae. やがて lex divina が消滅し、lex naturae が出てくる。この法則化が歴史に用いられるようになってくる。近代西洋自然科学は神学的背景を持つ。Berdyayev ベルジャエフ。これは20Cロシアの思想家で『歴史の意味』を著した。その中で「キリスト教はいわば自然を殺した。キリスト教の帰結が自然の機械論化であった。」この言葉の中に神・人間・自然を見よ。ギリシアの自然観を見てみると自然観の転換である。ベーコンの生けるギリシア的自然観からの大転換。キリスト教は人間と自然とは異質な他者。西洋文化圏において成立した特殊な見方であり、思考である。西洋近代文明は自然の死への文明であった。科学革命は伝統的な自然概念を変革して大いなる思想の変革をもたらした。近代科学は一定の歴史的所産であり、力学を中心に物理、化学、生物が位置づけられる。これは19Cまでの学問の序列であった。

科学は歴史の一時点における一定の状況から生じたものであり歴史の所産である。科学は地域と時代を示して西洋近代自然科学と呼ばれるべき。科学は普遍のものではないからである。パラダイムからパラダイムへの転換。科学の思想史。ヨーロッパの精神史。科学は単なる一つの学問が成立したのではない。ヨーロッパの精神史の問題である。

3) 総轄

1. 「分析」の史的意味

ヨーロッパ近代科学の成立は比喩的に言えば、あらゆる現象を「時計」として見ることである。方法は分析的方法である。つまり、要素に分ける。要素の性質や要素間にみられる関係をみるものである。つまり、対象を要素に分解できるという前提に立っている。比喩的には「時計」であり、同じ構造を持つ。13末にヨーロッパに時計が出現した。ケプラーKplerは「天空の機械は時計である」と述べている。この比喩が結実したのはデカルトである。デカルトは自然を機械になぞらえたが、その機械は時計である。自動機械としての動物機械説。自動機械としてのゼンマイ時計。これは18Cのド・ラ・メトリの『人間機械論』。要素論という考え方はデカルトに遡る。学問は要素に分解されて考えられるべきであるという考え方。

デカルト「先ず、私が吟味する問題の各々を出来る限り多くの小部分に分けること。次いで最も単純で最も認識しやすいものから少しずつ、いわば階段を踏んで最も複雑なものへの認識にまで登っていくこと。」つまり、研究の対象を小さな要素に分解する要素論は対象を要素に分解できるという前提から成っている。要素を明確にすれば、大対象はそれを構成することができる。正しい要素の認識はいずれ、全体の認識に連なっていく。これは研究の微細化を意味する。しかし、やがてこれは全体が解体してしまうということが明らかになってきた。

William Harvey『血液循環』1628 これはデカルトに大きく動かされたものである。心臓の運動は機械の運動になぞらえられている。組織や器官を機械と見なす傾向があった。ポンプとしての発想。これは心臓など臓器移植の原点である。生死の問題が出てくる。動物の生命を操作することに西洋では抵抗が無い。動物は自然であり、人間とは異質なものである。

atomizum は自然に存在するものがこれ以上に分解することが出来ない個体に分割することができるという individuum。atomus（希）は individuum の意である。これらを合成して全体を捉える発想は 17C 以来のものである。ガリレオの分解的方法と合成的方法。「科学的＝分析的」という考え方が出てくる。分析が絶対的な価値を有している。というのは、言ってみれば西洋的なドグマである。分析加算主義または、要素還元主義。Popper はこれをバケツ理論と呼んだ。これら知識の歴史はバケツの水が溜るのと同じに、知識の蓄積と共に科学は進歩する。このような考え方が 20C 科学にある。これは啓蒙思想にもあった。この考え方が社会に応用されたらどうなるか。ホブズは社会にその考え方を拡大して、社会科学とした。『社会契約論』これは国家社会が分析される。ロックにしてもしかり。人間の自然状態や自然社会などの基本的諸概念に還元するのである。

2. 科学を超越する領域

西洋近代科学の基本的前提、即ち西洋近代自然科学および、それをモデルとする基本的前提とは何か。クーンは西洋としての科学のパラダイムとは何か。ひとつは 要素論。一つは主観客観の二元論。要素論は述べた。主観客観の問題。これは主体と客体とが明確に分かれる。自然と人間との関係。デカルトの二元論と共通するもの。客観性の問題がでてきた。今日問われているものはこの前提である。例えば、相対性量子力学を見ても分かる。認識するものとの関連。観測する者との関連。これらは既に二元論では説明できない。主体がなければ時間も空間もない。Uexkul ? Umbelt（環境世界？）はハイデggerに受け継がれて、「世界内存在」になる。西洋近代科学は一定の社会・文化・時期を根底を基盤とする歴史的イベントである。科学の存在そのものを問題化して自覚することが重要である。これは既に科学史では処理できない。これは精神史であり、思想史である。

この科学思想は歴史思想と緊密に関連する。時代は 19C においてより明確になるが、Positivisme（仏：実証主義）が起こってくる。これはコンテ Comte の語である。対象を要素に還元してそれらの要素を因果的に結合することによってこの対象を復元していく方法である。これは何であるか。これは西洋近代自然科学の方法を模倣してモデルとして形成さ

れた方法である。実証主義は西洋科学への信頼が根底にある。この考え方が歴史学において展開されたらどうなるか。これは Buckl (英) や Taine (仏) の要素還元する実証主義的歴史学がでてくる。歴史世界は人間の世界であり、人間の行為は意味を持った世界である。世界は延長つまり、生命を抜いた物である。心の世界はこの対象は捉えることができない。ドロイゼンは歴史的世界は原子の世界ではないとして Buckl の世界観を批判する。実証主義的歴史学への反論である。現在においても、純粹客観が存在すると思われる。

第2日目 第2限

第4章 デカルトとヴィーコ

第1節 デカルトと歴史

1. デカルトと懐疑 (Pyrronismus Historique)

デカルトは歴史に対してどのような考え方を持っていたか。デカルトが数学を用いたのは自然現象に対してであった。2つの相反する世界。自然的世界と歴史的世界に2分して、自然的世界についてのみ真に確実な知識が存在するとした。数学的知識。歴史的世界についてはそのような確実な世界・知識は存在しないと。デカルトは明析判明 *clair distant* な知識を求めた。数学のような厳密で論証的な知識を求めた。clair はあるものが精神の前に現前していること。distant はそのものが他の物とはっきりと区別されていること。

デカルトは『方法序説』の中で、歴史について述べている部分がある。「最も忠実な歴史でさえも読まれるための品位を高めようとして史実の価値を変えたり、加えたりすることはないにもせよ、少なくとも、きわめて些細な事情はほとんどいつも省いてしまう。そのために残る部分はあるがままには現れない。(落合太郎訳)」ここに示されているものは「歴史叙述は実際の出来事とは合致しない」という歴史に対する懐疑である。歴史に対する懐疑的態度を *Pyrrhonisme historique* という(ピロンはギリシアの懐疑論の祖と呼ばれる)。

エポケー。曖昧なことに対しては判断を中止する。

デカルトは歴史という言葉 *histoire* は *fable* 寓話であるとした。しかし、この懐疑の態度は反面重要な可能性を持っていた。この可能性とは資料は真実を歪め隠してはいないかという懐疑を抱く。資料の真偽を問うことは後の資料批判の可能性を指し示すのものであった。18Cの主流。critique。これはその当時までは趣味の判断を意味していた。これが真実の検証の意味に変わったのがこの頃である。懐疑が認識の手段となった。この Pyron はこの可能性を持っていたが、デカルトははこの可能性を発展させなかった。これはデカルトが自然に向かったからである。デカルトが発展させたかったこの分野を発展させたのは17C後半からのデカルト派である。この派は西洋古文書学を成立させた。とりわけ業績を残したのは仏の Mabillon『古文書論』6Vols.(1681)である。デカルトと Mabillon は同郷出身であった。Mabillon はベネディクト派の修道士であった (Benedictus Mabillon)。西洋古文書学は教団間の論争を通じて成立したのである。Jesuit 教団はデカルト派 (カルテジアン) であり、

反動団体としていられているが、その Jesuit の Papebroch ペープブロックは古文書偽作説を出した。これは Benedict には大事件であり、これに反駁した。この中から Mabillon の『古文書論』6Vols. が出てきた。最初はこの『古文書論』の日本語題名はこうではなかった。Mabillon は『De re diplomatica』を著したのである。ある人はこれを「外交論」と訳した。diplomatique (仏) には2つの意味があり、古文書と外交とがある。

2. 資料批判の背景と意義

Quellen Kritik 資料批判 (これもある人は「源泉批判」と訳した) の背景について述べる。もう一つの古文書学の成立の背景。Bella diplomatica, bella: 争い、つまり古文書論争であるが、当時の絶対王政に対して権利の根拠を示す必要がある。そのとき、古文書によりしかも、真実の神聖な古文書によって司法的に証拠能力のある古文書で彼らの身分を保全した。ヨーロッパの古文書学の誕生である。例えば、イギリスでは古文書学が現れなかった。フランスで生まれた。何故か。イギリスは慣習法であった。これが先どのように展開していくか。古文書学がフランスに起こるとドイツは大学でこれをカリキュラムに組んだ。Quellen Kritik はドイツにおいて成立する。この関連で古文書学を考えたい。

18C の終わりに至るまでは法律学部の補助学科であった。これを歴史学の資料として応用する。Vom Stein(MGH) が著した Monumenta Germaniae Historica(M.G.H) にはその精神が現れている。Niebre ニーブル、Ranke ランケに結実していく。日本の史学概論は西洋にはない。強いて言えば、Historik である。ここで Quellen Kritik が扱われている。これは歴史学の最も基本的な部分である。これは 19C の問題である。

デカルト派の根底は Pyrrhonisme historique であった。歴史世界の認識を求めるものではなかった。当時はまだ erudition (考証学) の世紀であって、まだ歴史の世紀 (19 世紀) ではなかった。考証学は歴史学ではない。近代歴史学成立の思想的根拠が欠如していた。デカルトは歴史を学としては捉えなかった。これを学たり得ることを基礎付けたのはイタリアのナポリの Gian Batista Vico であった。

第2節 Vico(1668 – 1744) の時代と環境

ヨーロッパでは有名であるが、日本では有名ではない。デカルト派の歴史的態度に対して極めて鋭い対立を示した。貧しい古本屋6人の子供の第4番目として生まれ、古典の才によりナポリ大学の職を得た。修辞学を教えた。Vico の業績は言語学など多岐にわたる。2つだけ挙げるとローマ法に専念した。Niebre やモーゼンの法学における歴史的方法における先駆者である。もう一つ挙げるとホメロス研究。ギリシア民族としての作品民族を代表・象徴するとしてホメロスを扱った。Vico の生まれたときはイタリアの文化は没落していた。当時はデカルト哲学が支配的であった。Vico も最初はデカルトを信奉しており、歴史を軽蔑していた。この Vico が 40 才の頃デカルトに反対する立場をとった。学たり得る歴史を主張したのである。これはヨーロッパ精神史として重要なことである。ナポリは異民族の支配を

受けた地域である。スペインの属領である。スペインからオーストリア、フランスと異民族の支配を受けた。この地でこの業績を挙げた。これには精神的抵抗があった1725年初版『Scienza Nuova 新しい学』『庶民族に共通なる本性を考究する新しい学の原理』を出した。57才。彼は独学でこれを著したのである。(晩年になって著したこの本は、この著者の年齢になってそのものの持つ意味が判るようになる。)

第2日目 第3限

第3節 Vico の歴史思想

Vico の歴史思想を以下3つに要約したい。

- 第一は Verum=factum
- 第二は Teologia civile
- 第三は corso-recorso

1.Verum=factum

Vico といえば corso-recorso が有名である。Vico は精神史で有名である。私は Verum=factum が重要と考える。だから、これについて述べてみたい。「新しき学」は表現は難しい。Auerbach は戦間期に Vico の解釈？があるがそれですら難解である。英訳も出版され、日本では清水純一訳（世界の名著）があるが内容は難解である。しかし、根底は明確であり、デカルトに対立したものである。当時は異端審問の時代であり、教会の検閲を逃れるためにかいじゅう？な表現を採ったとされている。デカルトにとっては歴史は学問ではなかった。歴史的世界では真に確実な知識は存在しないとされた。しかし、Vico の「新しい学」において基礎づけようとしたのは専ら人間の世界である。Vico はこのとき、根本命題から出発している。

「真なるものは作られたものである。」 どういうことかと言え、真の認識は私が作ったもの、引き起こしたものにのみ可能である。スコラ学に発した命題である。対象を作った者が対象を認識することが出来る。Vico は認識と創造が同一であるというスコラのトポス (topos: 慣用命題) である。デカルトが学んだものもスコラであり、またそれを否定したのもスコラであった。『神学大全』の中に同じ表現が出てくる。しかし、Vico の意味ではない。スコラのトポスではあるが、それに新しい生命を吹き込んでいく。これが Vico の命題である。ここには中世と近代の合体がある (つまり、ヨーロッパ)。Vico によれば、この原則に従えば自然は神にとってのみ認識が可能なのである。位階秩序によると人間が作ったものではない自然は神により作られたものであるから、人間には自然は真には認識ができないのである。しかし、Vico の学の存在領域があった。Mondo (世界) naturale と Mondo civile。Mondo civile は人間精神の所産であるが故に人間にとって認識可能である。物を作る者は単に観察者以上のものを見方ができる。外部の世界について知るということは、岩石を観察する

のと人間の心を観察するのとは別の認識活動精神行為を必要とする。人間世界は内側から人間が捉えることができる。しかし、外部の世界は人間が人間を認識するようには認識できない。人間が作った世界は fantasia 想像力によって認識することができる。これら後年ディルタイの Verstehen (理解) の事実上の先駆である。

つまり、Vico においては外部の世界は人間の行いの世界を理解するようには理解できない。人間が理解できるのは人間の世界つまり、歴史の世界のみが認識可能なのであり、それこそ「新しき学」なのである。Vico の『新しき学』の中に第一巻原理 331「この社会は確実に人間によって作られたものであるから、その原理は我々人間精神そのものの変化様態の中に求めることができ、またそうでなくてはならない。この原理に思いをいたす者は誰でも従来哲学者という哲学者がすべてこの自然界の学を究明することのみ汲々としてきている (デカルトを暗に批判)。その一方、この諸民族の世界即ち、文明世界を考察することをいかになおざりにしてきたかということに気づいて愕然とするに違いない。自然界を作ったものは神であるからその学を持ち得るものは一人神のみであるが、諸民族の世界即ち、文明世界を作ったものは人間であるからこの学を極めることができるのは人間なのである。」以下本末転倒する認識に至ったのは人間精神の欠陥によると続いていく。この文章の意味するところは重い。これ一つで論文が可能であろう。人は自らが作ったものを認識する。人間は歴史を作った。よって、人間は歴史世界を認識することが出来る。このような3段論法にみる文体論的にも言い得ることである。しかし、彼の言いたいことは「人間が歴史世界を作った」ことを強調したかったのである。この発想は Dilthey が継承している。カントが哲学を科学の中に基礎付け、Dilthey は歴史学を基礎づけようとした。

Dilthey の「歴史学の第一条件は歴史を探求する者が、歴史を作る者と同一で有るところに存する。」これは Vico と同一である。19C から 20C のディルタイを理解するには Vico の理解が不可欠である。人間が人間を認識するのは自然を認識するのとは違う認識の形式である。人間が人間を認識する方法。これは新しき学である。理性のみではない感性や知識のある人間は明らかに extensio とは異なったものであり、それを認識するのが新しき学なのである。このように、デカルトと Vico は存在の全領域を自然と歴史に二分するのは同じであるが、(この二分の仕方自体が特殊的な思考である。) デカルトは数学的知識 (人間のいない世界) に求め、Vico はデカルトによって軽蔑された歴史の世界を学に高めようとした。Vico によって開発された学の新しい領域は当時においては自然科学が唯一の学問であるとされた時代であるから当時の学会の流れに反抗するものであり、当時には無視された。しかし、Vico の学問は射程距離は大きいものであり、知の体系が形成されつつあったとき (デカルトからカントへ)、それに対立する独自の姿勢を打ち出す。これは容易ならざることである。この Vico はヘルダーに継がれていく。これが評価されたのはゆうに 100 年後 19 世紀になってからのことである。これで第一の Verum=factum を終わる。

2.Teologia civile

Vico は彼の本の口絵によって彼の概念の概略を説明して序論としている。

神の摂理の視線は形而上学を表す女性の心臓を通してホメロス（歴史世界）に至っている。そこから具体的に述べると、神の摂理は形而上学を通して歴史的世界と結び付いている。これが実は新しき学である。新しき学。形而上学は文明世界に作用後の世界に存在する神の摂理を明確にしようとするものである。「人間の文明化は神の摂理によって秩序づけられ配置されている。このような神の導きこそこの学が解明しようとする根本命題の一つである。従って、この観点からみれば、本書は神の摂理を論ずる文明神学 *teologia civile* とも言えるものである。」

Vico の枠組みは神・人間・自然の三者は残っている。では、歴史神学とどのように異なるのであろうか。同じではないか。Vico がこの学は神の摂理を歴史的プロセスの秩序として捉えたものであり、神の摂理を除いても成立するものである。ならばこそ、これは秘密の異端であるとされた。Vico が「摂理」に託したものを読まなくてはならない。文明神学の摂理は歴史過程の秩序であった。これに次の *corso-recorso* になっていく。

3.corso-recorso

諸民族が必ずたどると考えられた3つの段階、しかも、それが巡回するというのが Vico の *corso-recorso* である。

第一の step は神々の時代 これは諸民族の primitive、神政の時代である。

第二の段階は英雄の時代 政治的には貴族の政治

第三の段階は人間の時代で民主政の合理的な政治

これは無秩序から秩序への段階である。しかし、第三の段階は永続するものではなく、文明の自己破壊により新しい野蛮への逆行 (*re-corso*) を生じる。ローマ時代の後、中世の文明の回帰へ走った。しかし、これは単なる回帰ではない。これは新たなる上昇である。これはギリシアの永ごう回帰ではなく、また現代の歴史哲学の回帰でもない。これは独自のものである。しかし、この考えは当時に理解されることはなかった。Vico は友人の手紙に「私はこの本を砂漠で出版した」と短く表現している。Goethe はイタリア紀行の中で Vico に触れ、評価しているが、Goethe はそれを読まなかったようである。イタリアでもドイツでも評価されなかった。フランスのミシュレーが「Vico は 18C において書いたが、それは 19C のためになされた。」19 世紀は歴史の世紀。ミシュレーは心の底から興奮感激して Vico を翻訳紹介した (1827)。ミシュレーは Vico の翻訳を通じて歴史家として誕生していく。ミシュレーは Vico の再発見者である。Vico 以外に師はいないと述べている。Vico は啓蒙思想の時代に生きた。では Vico の生きた時代、つまり啓蒙の世紀の歴史観とは何であろうか。

第2日目 第4限

第5章 啓蒙主義的歴史観

第1節 基本的な特長点



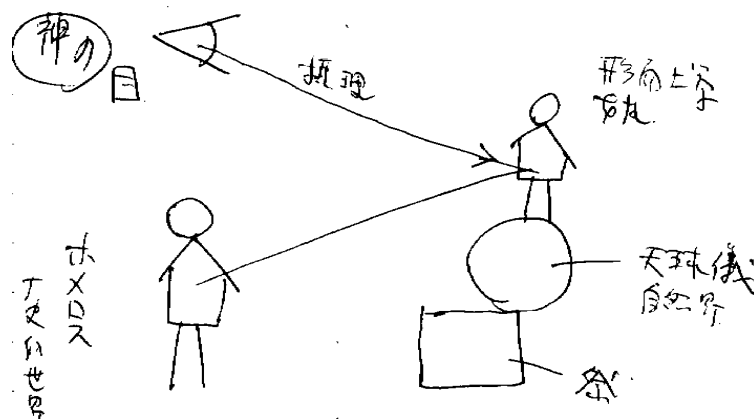
Vico 『新しき学』 の口絵
 (「世界の名著」 ヴィーコより引用)

1. 聖から俗へ

ここでは啓蒙主義的歴史観を総括して述べておく。基本的な特長は啓蒙思想の基本的特長である。近代ヨーロッパの開始である支配的文化に対立する人間の生活や思考を考え、人間の領域を世俗化するものであった。特長傾向は経験の中で解明し合理的に生活を秩序だてる。ここには分析精神と実践的精神とが見られる。これは啓蒙歴史観にも現れるものである。啓蒙歴史観を3つに要約する。それらを1語で述べると「聖から俗への転換」の問題である。ヨーロッパ精神史において極めて重要な問題をはらむものであり、単なる聖の非難否定ではない。聖を否定しつつ聖の枠組みを残している。また俗も日本語の俗とは異なる。そこで啓蒙主義的歴史観の特長を3点述べてみたい。

1) 歴史神学からの開放

啓蒙主義的歴史観は歴史神学からの開放を意図した。このような開放は Bossuet(1681)の『世界史論』からボルテールの『諸民族の風俗と精神に関する私論』



への批判的転換に明確に現れている。Bossuet は当時フランスの司教であった。雄弁家であった。『世界史論』はアウグスチヌスを模範とする最後の歴史神学であり、天地創造から起草してカール大帝までを叙述したもの。ボルテールのもはその続編としてカール大帝以後ルイ 14 世までの叙述である。(『ルイ 14 世の世紀』) しかし、これは単なる続編ではなく、従来のものとは内容的には対立している。風俗史は政治史とは異なった文化史を成立させたというのが通説となっている。しかし、ここではその意味ではない。歴史哲学の問題として取り上げたい。Philosophie de l'histoire はその序文として書かれた。これは初めてボルテールによって提起されたものであり、歴史神学から歴史哲学への批判的転換であった。この第一の点は2つに分けられる。

1. 内容について

これは旧約世界史叙述の定型の打破である。Bossuet の叙述は歴史神学であるから従来の旧約世界史に従っている。中国を初めとして極東の諸国には何等言及していない。然るに、ボルテールは「第一章 中国 古代その学問」から始めている。これは顕著な相違である。なにゆえ中国から筆を採ったか。ボルテールは当時の Jesuit ジェスイットの中国研究に基いている。これは当時ヨーロッパにおいて唯一の中国の知識の源泉である。

参考までにヨーロッパの中国に関する知識の摂取の時期について述べておこう。

- a) マルコポーロ以前 これは絹の産地として知られていたに過ぎない。
- b) マルコポーロ以後 旅行記による知識
- c) Jesuit によるもの Sinology (支那学) の基礎が作られた。(フランスの中国研究は当時進歩していたのである。)

当時、Jesuit の中国研究で何が問題であったか。これは中国の世界史と旧約世界史の年代が一致しないことが指摘され、旧約の再吟味が要請された。中国の古典に日食の記事が見える。この天文学の計算によると、ノアの洪水の年代(?年) 以前に中国王朝の存在がみられる。ノアの子孫以外の人々が存在したということになる。これはノア以外の人々が死滅したとする旧約の人々を苦慮させたらしい。年代学が当時論議され中国年代記が旧約年代記を破壊したのである。中国古代史の確実性を主張して旧約世界史を失墜させたのである。ボルテールの風俗論が中国から筆を起こしたのもその背景がある。当時中国は 18C の西洋人にとっては新しい精神体験であった。中国と西洋。これは一つのテーマであるが、中国とフランス、これにボルテールは一生を捧げた。孔子の肖像を書齋に掲げていた。このような中国の発見は地理上の発見以来の精神世界の拡大となった。つまり、これは時間の発見、歴史の発見である。「発見」はヨーロッパ人の用語である。

ボルテールによって伝統的キリスト教的枠組みが崩壊される。これは現実的の外面から起こっているのである。これは当時のヨーロッパの時間体験であり、空間体験である。

2. 理性について

Bossuet の神の摂理に基づく「信と不信との闘い」である。ボルテールにとっては理性と非理性との闘争であって理性への進歩であった。啓蒙的歴史観は思考形式は伝統的歴史観と同一である。近代の歴史哲学は反神学として成立しながらもその神学的思考の枠組みは同一である。「信と不信」、「理性と非理性」、「信仰？と進歩」、「聖と俗」の問題であった。

Bossuet	Vico	Voltaire
1681	1725	1756

Vico は歴史神学の枠の内にあるように見えるが、歴史過程それ自体が摂理であった。Vico は歴史の転回点としてイエスには触れていない。これは歴史神学との大きな差である。また Vico は異教とキリスト教とを平等に取り扱っている。キリスト教神学において最初の平等な歴史神学である。直線的時間の構造の中では進歩が出てくるが、Vico は螺旋である。Vico の文明神学は独特の地位を占めるのである。

2) キリスト教における人類の観念の世俗化

歴史を人類史として確立したのは啓蒙主義的歴史観であった。キリスト教の人類の観念は信仰の共同者である。その観念は神の前で平等で一体的存在としての人類として捉えられた。これに対して理性を前にしての一体的存在としての人類。理性の立場において人類を捉えた。その中の法則を見いだそうとした。世俗化が行われた。啓蒙思想はキリスト教の中から神の欠如態として発展した。この立場においてヨーロッパがたどる進歩のプロセスは他の地域がいずれとらねばならないプロセスの原型である。ここに人類の歴史の統一した意味を示す。これはキリスト教の世俗化。

西洋典型論とアジア停滞論。これは表裏一体となっており、これは今日批判反省される所である。西洋は典型か。東洋は停滞か。これは極めて重要な問題である。第2時世界大戦後の第論争テーマであった。

3) 実用主義

更に理性は未来と...?...

啓蒙主義的歴史観は言うならば、現在が基準となって過去の事実を評価して裁いたものである。実践的現在が過去を裁いたものである。現在の司法や行政の正当性を過去の中から引き出し、裏付けるために歴史理論を利用したものである。歴史叙述は過去の中から有用なものを引き出すという目的を持った。有用歴史。実用歴史。しかし、この歴史観は現在の歴史観からみて不利なもの、役に立たないものは過去の事実から抹殺される傾向を持った。これは政治主義に走る危険性があった。神学の端女（はしため）から政治の端女に走るのである。つまり、歴史世界は寸断される。現在と過去とのかかわり合いの持ち方が問題となってくる。啓蒙史観が 19C 歴史の世紀において非歴史的と評されたのである。

第3日目 第1限

第2節 百科全書における啓蒙思想

1. Bayle の歴史的批判的辞典

百科全書を論じるにはその先駆をなす歴史的批判的辞典における歴史思想を見ておかねばならない。百科全書 1751 - 1780 は今日の百科事典とは異なり、18C のフランス啓蒙思想を集めたものである。この先駆をなす歴史的批判的辞典を見ておく。この歴史的批判的辞典 3Vols. はピエール・ベール Bayle が著したもので一人で成した。だから、この中の歴史思想は Bayle のものである。百科全書はこの Bayle の思想を受けている。Bayle は歴史的懐疑論者である。この派は資料を吟味する立場をとった。矛盾を指摘して教会に批判的であった。ボルテールは Bayle の直接の後継者である。ボルテールは旧約聖書に批判的に取り組んだ。Bayle が百科全書に与えた影響は計り知れないものがあり、デイドロは「我々は 18C に同時代人を持つ」と述べているが、同時代人とは Bayle その人である。Bayle は先述したように懐疑論、つまりデカルトの思想を歴史の世界に取り込み Bayle によって歴史は新しい方向を見いだした。Bayle は現象を現象として観察し、その存在の根拠を認識しようとする試みを退ける、つまり現象の内部において確実と不確実とを区分することを目指した。Bayle によれば正しく確認され、確実な基礎を持つ事実を集めることが全ての原点であるとした。Bayle は最初の実証主義者である。実証主義はコントの意味のものである。コントにおいて positif。これは普通「実証」と訳されるが、実証は現実的で確実かつ清潔という意味である。(ほんとうはコントは6つの意味を述べている。) Bayle にとって事実とは歴史認識の終点である。(本当はそれが出発点であるが、Bayle にとっては事実に至る道を最初に開拓しようとした。)

古代ギリシアにおいてはアリストテレスにおいては普遍的真理であり、個別的真理ではなかった。しかし、Bayle は個別的真理への道を開こうとした。個々を考証することにより、初めて歴史的事実が獲得される。歴史的批判的辞典の意義は事実的なものという概念が捉えられたというところにある。これは精神史における Bayle の役割である。考証学 erudition の哲学的な基礎付けである。erudition は普通の考証ではなく、博識と訳されている。critique これは批判と訳されるが事実の検証であるから erudition は critique と同じである。単なる博識ではない。Bayle はむしろ虚偽の発見の天分がある。教会の伝統と権威の打破であり、当面の対象は Bossuet の『世界史論』であった。前回は Bossuet 対ボルテールを話したが、この中 Bayle がはまり込む。

Bossuet Bayle Voltaire

Bossuet によれば、伝統的権威はバイブルの権威に基づくものである。バイブルの内容それ自体は教会の権威に基づくものとされている。教会の権威が歴史的確実性を基礎付けている。上からの権威が確実性を基礎付ける。しかし、Bayle は歴史的事実を確証することにより教会の権威を伝統を基礎付ける下からの検討である。これは当時の教会の権威と伝統に破壊的な影響力を与えた。これが Bayle の一つの特徴。

もう一つの Bayle の特徴は歴史的批判的辞典は古代と近代を偉大な時代と考える。それらの間の中世を歴史的批判的精神を欠く進歩のない時代とするものである。これは実はル

ネサンスや次の百科全書とも関連して興味ある問題を提起する。

百科全書は形式内容のみならず理念も Bayle のこの歴史的批判的辞典に負うものである。このため、ヨーロッパにおいて「デイドロの辞典（百科全書のこと）の項目の一部は Bayle の辞典から剽切されたものである。」という定評がある。

2. 百科全書

18C 啓蒙思想の集大成したものであり、フランス革命を思想的に準備したものである。平等・自由・批判精神を与えた。編集者は Diderot とダランベール d'Alembert である。(Didrot は岩波文庫にある ...?... の甥) これに多くの人が筆を寄せている。この間において、本巻は 17Vols.、補巻は 4Vols.、図版 15Vols. (当初 11Vols.)、索引 2Vols. の大部のものであった。『Encyclopedie (アンシクロペディ) または、学問・芸術・工芸の合理的辞典』というのが題名である。この題名の中には学問・芸術の他に工芸が入っていることに気を付けたい。これは artes mechanicae を重視しているということが判る。手の技術を重視した。これは Didrot やダランベールの見識である。技術の伝統に自由学科 artes liberales と同じ立場を与えている。これは近代科学が新しい学問と思想の改革をもたらしたと同じようにこれは新しいヒューマニズムである。人間の全ての認識を十分に確認されて事実を原理とする真の体系に統一し、もって人類の一般的教育に貢献しようとするものである。ここに述べたことは Bayle の理念が含まれている。一般的教育と言ったが encyclopedie はフランスのラブレー (16C フランスルネサンスの作家: 『パンタグリユエル』 岩波文庫) が初めてこの言葉を使用した。これは元々はギリシア語に発する。この原義はあらゆる学芸を集大成された教育である。百科全書の扉絵が啓蒙主義の真髓を物語る絵であって、この絵を見てみたい。(次頁)

イオニア様式の殿堂の中程に光を放つ女性、しかもヴェールに包まれている女性が黒い雲を退けている。この女性が象徴しているものは真理である。真理を象徴する女性が光を放ち、雲を退け散らしている。この真理の足元にあるのが神学、向かって右に理性と哲学がいる。この理性と哲学が真理のヴェールを取り去ろうとしている。

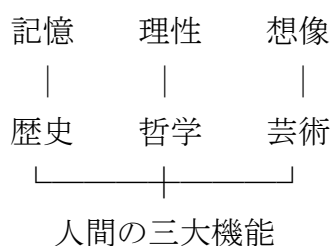
図像が何を意味するかが問題である。ここから種々のものが引き出されてくるであろう。これは啓蒙の真髓を物語る口絵である。今までは雲に包まれて見えなかった真理が今、見え始めたという図である。 illumination (啓蒙)。日本語の啓蒙では illumination の意味は見えない。雲を取り払うこと、光を放つ真理が見えだすのは正に illumination である。英語で enlightenment。ドイツ語は Aufklärung。すべて明るいのである。啓蒙では判らない。蒙は発蒙からきている。刑を課した足かせを解くこと。中国の刑罰からきている。これでは判らない。

この絵から判ることを3つばかり。

1)18C は非歴史的な世紀である。19C において啓蒙思想は非歴史的であるとされてきた。18C において歴史的な位置は低いという通説もある。しかし、その通説や歴史の位置は必ずしも低くない。この絵では歴史は真理の間近にいる。

2) 「古代および近代史」を象徴する女性はいるが「中世史」を象徴する女性はいない。17C フランスに古代派と近代派の論争があった。近代派が勝利を取めた。ところが中世は比較においてすら登場することは決してない。つまり、中世史の欠如は中世は積極的に必要ないことを示す。ダランベールが百科全書の序論を書いている(1751)。その中で、「光明の数世紀に先行した無知の長い中間時代」という言葉を用いている。光明 = illumination つまり、啓蒙である。中世は古代と光明の世紀の中間にあつて暗黒無知野蛮な時代と考える。これはルネサンスのところで述べた区分思想の流れの中で出てくる言葉である。中世は暗、近世は明。歴史には断絶 (catastroph?) がある。ここで分かれ、歴史を暗と明で捉える。ルネサンスの2元論は啓蒙思想で拡大する。この二分論は明解であるが、単純すぎる。歴史はそのようなものではない。

3) これは百科全書の学問の分類を物語っている。



これはベーコンの学問の樹を引いている。

このように分類されたものに更に対象による区別を加える。ここから、絵からはなれて...?...。歴史については神・人間・自然の歴史がある。実はここに神・人間・自然の枠組みは保存されている。しからば、百科全書の関心は「自然の歴史というのは不適當であり、神の歴史は扱わない。」(ボルテール) つまり、人間の歴史を関心事としようとする。人間の歴史は更に分かれて政治史と学芸史に分かれる。

histoire

civile (政治以外に経済、社会、生活を含む。)

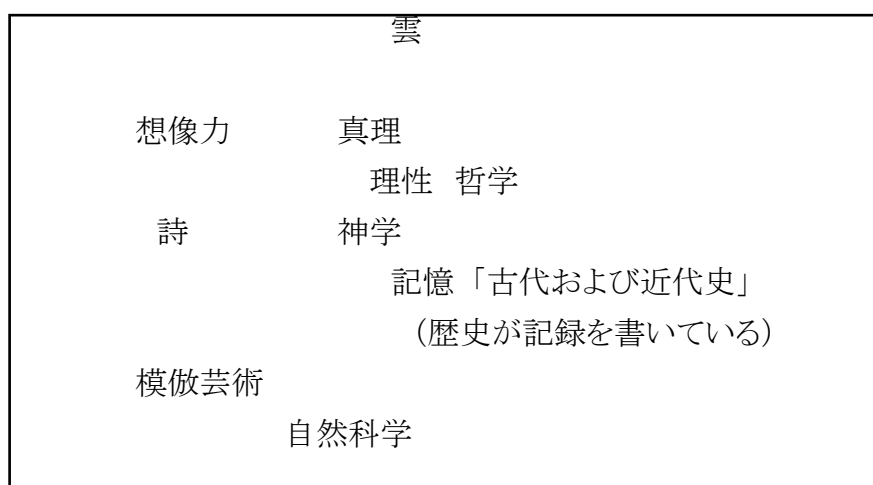
litteraire (技術も含まれる)

ここに、いわゆる政治史と文化史との分化が認められる。百科全書が取り上げるものは人間の全領域に思想を述べたのである。

第3日目 第2限



百科全書の扉絵



擬人化された学問の配置

第3節 進歩史観の確立

第一次世界大戦まで西洋人を支えていたのは進歩の確信であった。しかし、第一次世界大戦でその確信はぐらついた。進歩の概念が懐疑にさらされている。日本ではようやく、第二次世界大戦以降において懐疑されてきた。歴史は進歩するという簡単なことではない。18C ヨーロッパ、特にフランスの歴史観の延長である。歴史の進歩は歴史家の実証に基づいて生まれたものではない。これは進歩信仰と言って良く、18C 後半のヨーロッパ、特にフランスの歴史観である。人類の歴史から見れば新しい歴史の見方である。この歴史の進歩は既に第一次世界大戦で動揺している。この進歩史観はフランスの Condorcet コンドルセを中心に話をしたい。この先駆としてチュルゴー Turgot がある。これは時間の関係で省くことにする。

コンドルセも百科全書の執筆者アンシクロペディストである。同時にこれは positivism の前史ともなる。コンドルセ (1743 - 94) は数学者であり、政治家でもある。ジャコバン党と対立して逮捕された。立法議会における活躍、教育改革案の起草で有名。つづく国民公会において憲法の制定を巡ってジャコバンと対立し、潜行したが捕らえられ、指輪に隠し持っていた毒で自殺した。この隠れ家の中で執筆 (93 - 94) したのが『人間精神進歩の歴史』である。正式には『人間精神の進歩に関する歴史的展望の素描』。これは世紀の遺言状と呼ばれているが、同時にこれはコンドルセ自身の遺言状でもある。これはヨーロッパの進歩史観のプロトタイプをなしている。以下5点にわたって要約したい。

1. 理性

コンドルセにおける進歩の基準とは何か。これは2つの基準を用いている。理性的科学的認識の進歩。それと、倫理的進歩。この倫理的進歩は理性的科学的進歩と共に必然的に達成されるとされている。進歩思想の確信は人間の進歩の確信は人間の理性である。人間の非理性的側面は人間の進歩を阻害する。つまり、理性の優位。コンドルセにとっては誤りを取り去るのは自然科学、特に物理学的知識の進歩である。自然科学に対する信頼。近代の科学技術が巨大な福祉をもたらした。その自然科学信頼の基礎は普遍的な法則。人間の知的道徳の世界にも普遍法則が存在する。理性の優位は同時にキリスト教否定である。コンドルセにとっては神への信仰は野蛮人の迷信の残りかすである。暗黒で危険で光明の敵である。キリスト教の精神は科学の衰退の合図である。

2. 歴史内在的法則。歴史の優位

コンドルセにおいては自然のプロセスと人間のプロセスを一括して支配する普遍法則は神の掟や意図ではない。プロセス自体に内在する法則。歴史内在的法則。歴史に内在する法則。19C の歴史の理念の先取りしたもの。コンドルセの進歩史観は 19C の歴史観に継承された。特に、19C において Comte。コンドルセの弟子にサン・シモンがいるが、その弟子に Comte と通じた。Comte は数学者でしかも社会学者で Siciology の語を作った。コ

ンドルセ的進歩史観を継承した。Darwinはこのコンドルセの洗礼を受けたからこそ進化論が出た。ダーウィンの生存競争の理論はマルサスの人口論の影響を受けたとされているが、whigの原則、whigが反映している。ダーウィンが熱心に読んだ本はBuckle『イギリス文明史』。Comte-Buckleと言われるほど。ダーウィンは自由競争、強勝劣敗を唱えるWhigに影響され、それ(Whig?)はCondorcetに影響されるのである。進歩史観があつて初めて進化論が出た。進化論が出てから進歩史観が出たのではない。

3. 近代優位

中世観の問題。『人間精神の進歩の歴史』の目次を見てみると10期に分けている。第6期を簡単に知識の衰退とある。第6期は中世に当たり、知識の衰退。rumielleの衰退。光明の衰退として捉えられた。この不幸な時期に人間精神は既に到達していた高所から急速に下降し、いたるところに無知がみられる。暗黒で光明の敵である迷信。キリスト教は科学の衰退の合図。第7期近代は西欧の学問の復興期。ここにヨーロッパは新しい光明が訪れた。中世と近代を暗と明に分けた。これがダランベールに引き継がれ、コンドルセも明暗2分をとっている。

4. 西洋の優位

コンドルセは中国は停滞状態(immobilite)として捉えている。支那民族は学問や技術で他民族に優先していたが、次々と他民族に追い越された。今や、恥ずべき停滞状態にある。つまり、これアジア停滞論。このアジア停滞論は西欧典型論と楯の両面を成している。コンドルセはこれをどう考えているか。「あらゆる国民は例えば仏人や英米人のような最も開化し、最も自由な、最も偏見から開放されている民族が到達した文明の状態にいつかは近づいていくはずである。この文明民族と野蛮なアフリカ土人や無知な蛮族との間を隔てている無限の距離も徐々に消滅していくはずである。」これは明らかに西欧典型論である。また、「ヨーロッパ人の植民地はアフリカやアジアにヨーロッパの自由の原則と模範、知識と理性を普及する市民達の植民地となるであろう。」アフリカやアジアに普及する根拠とした。コンドルセにおいては知的進歩と倫理進歩は関連があると信じていた。このような改善によりヨーロッパはアジアの教師たらんとした。歴史の法則が必然であれば、遅かれ早かれヨーロッパの発展段階に他の民族も達することを信じたのである。コンドルセは野蛮から文明への進歩であった。これは縦の進歩であるが、これを輪切りにすると最高はヨーロッパ、未開の地は下層という位階が生じる。布教による聖なる教化から文明による俗なる教化へという聖から俗への転換が現れている。コンドルセは人間の完全可能性 Perfectibilite を信じた。そして、知識の進歩と倫理の進歩は相伴う。これは近代化は善である確信につながる。しかし、理性的科学的進歩が調和があり、必然があるとしたコンドルセの信念は希望的観測でありその後のヨーロッパの植民地支配の現実を見ると、むしろ幻想であった。

5. 現在の優位

コンドルセの『人間精神進歩の歴史』の精神はそれが書かれた時期に由来する。Vicoの時と同様である。18Cの末フランス革命が勃発し、実現している。この時期に書かれている。アメリカの独立革命やフランス革命が成功し未来への希望が大きくなったときの叙述である。10期人間精神の未来への進歩。トゥルゴーの進歩史観(1850)との相違は時期の差である。コンドルセはつまり、2つの革命の成功で希望に溢れていた。人類の未来への進歩を疑うことはなかった。2つの革命は来るべき救いが神ではなく、人間の手による救いを期待させた。救いの世俗化である。キリスト教的終末論的世俗化である。キリスト教的歴史観は啓蒙思想の進歩史観に置き換えて残った。形は反キリストを採りながら意味はキリスト教なのである。このコンドルセの発想が変容を受けながら19Cに受け継がれてComteに流れていった。

コンドルセ Comte ダーウィン マルクス

コンドルセの進歩史観を一言で述べると「近代西洋の優位」である。しかし、これが第一次世界大戦で動揺する。シュペングラー『西洋の没落』。「理性の優位」に対する懐疑。哲学の理性への懐疑。進歩史観は近々2世紀のこと。しかも、近代西洋を基準としたものであった。しかし、同じこの時期に反対の動向が起こっていた。

第3日目 第3限

第6章 Sturm und Drang

第1節 Sturm und Drang 運動

このSturm und Drangはhistorismusの先駆であり、台頭である。ヘルダー Herder(1744-1803)はこのSturm und Drangの先駆者というか生みの親である。Herder30才の作品で『人間形成のための歴史哲学異説』は歴史主義の基本文献または初期の歴史主義の宣言とされている。Sturm und Drangの精神的意義はこの書の中にあるとも言われている。この『歴史哲学異説』は歴史主義の記念碑である。Sturm(嵐) Drang(衝動)は日本では「疾風怒涛」と訳されている。これはドイツにおける1770年頃から1780年代初頭にかけて生じた文学運動である。1770年から展開された運動(7年戦争以後)で戦後の運動。この運動は啓蒙主義に対する反動としての運動で個性の感情の尊重で理性の批判に対する感情の爆発である。理性により、開放された人間がむしろ理性により人間の感情が圧迫されることに対する反抗であり、人間性の回復に叫びをあげた。単に文学のみでなく、社会文化一切にわたって精神秩序に対する反逆となった。要するに、人間個性の自由な発達に根ざして根本的な開放を狙った。全ヨーロッパにおける前期ロマン主義 Preromanticismの一環である。Preromanticの中心はイギリスにあった運動であった。従って、イギリスのプログラムでドイツのSturm und Drangは展開した。このSturm und Drangの運動がド

イツの辺境にある Königsberg と Zurich から起こったのは決して偶然ではない。というのは、この2つは最も早くからイギリスの精神の動きに注目をしていた土地であった。この Königsberg において Herder に決定的な影響を与えた Hamann (独哲学者) は北方の魔術師とも呼ばれ、Herder にとって一生の師であった。Hamann は信仰を捨て?感情を説いたのである。一方、南方の魔術師 Zurich には Lavater ラーバター (ラファーターではない) はゲーテと親交を結んでいた。Lavater はドイツのプロテスタントの牧師で観相学、骨相学をした。人間の種々の形相の中に神の行いを見ようとした。Sturm und Drang の運動は Hamann がいて、Herder の師であったにとどめる。

第2節 ヘルダー

Sturm und Drang は文学運動であった。ゲーテ Goethe の若き時代。若きシラー Shiller が Sturm und Drang の代表。若きゲーテ 25 才の『若きヴェルテルの悩み』1774。ナポレオンもこれを愛読した。若きシラーは『群盗』1781。シラーの戯曲は絶対主義に対する反逆を強烈に強調した。これはフランスで愛読された。フランス革命前のことである。

Herder について。Goethe が日本に知られて Herder が知られていないのは片手落ちである。若き Goethe が文学に眼を開いたのは Herder によってである。Goethe-Shiller というよりは Herder-Goethe が組み合わせられるべき。

Herder は Königsberg に生まれ彼の生まれた年代 (1744) は実に Vico の没した年である。Vico は知られずして死んだ。ボルテールによって ... 理性?... を中心にして啓蒙思想が風靡していた。Vico はその中で知られずして死んだ。

Herder は解剖を見て失神して神学に入った。Königsberg といえば Kant。Herder も Kant を聴いた。しかし、大学において Herder は Kant よりも Hamann に影響を受けた。Hamann は Kant の友人であったが、啓蒙への激烈な反逆であり、理性ではなく、Vico の fantasia 想像力や心情にも所?を与えようとしたのであり、「詩歌こそ人類の母語である」とした。理性だけでは詩歌は作れない。ゲーテは Hamann の根本思想を次のように述べている。「人間が成就しようとする一切のことはあらゆる力の結合による総体から発生しなくてはならない。全て離ればなれのものは排除すべきである。」自然と歴史を通して人間の全般に対する観察と洞察は Hamann から Herder へ、Herder から Goethe へと受け継がれた。

全人的体験。これが Sturm und Drang の根本である。「Das Ganze: 全体」。最近、日本では Herder ルネサンスとも呼ばれ、Herder 研究が盛んになってきた。Herder 30 才 (1774) の『歴史哲学異説』は Goethe 25 才『若きヴェルテルの悩み』の年である。Herder は通例は『歴史哲学異説』ではなく、1784-91 に出た『人類歴史哲学考』4Vols. が有名である。しかし、私は敢えて 30 才の時の『歴史哲学異説』が重要であることを強調しておきたい。Herder の『歴史哲学異説』の本当の題名は直訳すると『人間形成のためのこれもまた歴史哲学』である (Auch eine Philosophie der Geschichte)。Auch eine とは何であるか。これは当時、特にスイスの Iselin という人が歴史哲学の本を書いていた。『人類の歴史哲学の憶測』。これはボルテールを中心とする啓蒙主義的歴史観に属するものであった。よっ

て、過去の時代を断罪するものであった。そういう事に対する異論として、これもまた一つの歴史哲学であるぞよと言ったのである。歴史哲学と言えばボルテールの歴史哲学もあるが、Herderはボルテールの歴史哲学の用語を用いながら内容は異なったのである。du Geschichte.(集合単数：die Geschichte)

第3節 『歴史哲学異説』

GeschichteはHerderによって深められた。以下、『歴史哲学異説』について3点を述べたい。

1. 一言で言うならば、全体に対する感覚

Herderの新しい歴史思考の一つは人間の全体に関する感情である。Herderにとっては単に感覚的なものは存在しない。感覚は必ず意味がある。Gestalt.これは個性的なものであり、逆に、個性的な仕方が感覚される。Herderは心理学の先生である。歴史的「生」全体の発見者である。HerderはEinfuhlungの語を作った。Einfuhlungは「感情移入」と訳されている。自分の感情を相手に移すことではなく、相手の身になって考えることである。「移入」ではなく、むしろ「感入」である。自分のものではない他人の異質な魂へのEinfuhlungが一切の歴史認識の根本条件である。これはHamannがHerderに説いたものであり、感受性の問題である。Goetheは「人は自分が愛するもの以外は何も知らない」と言った。感ずる魂。これがHerderの遺産である。啓蒙主義は人間に自らが機械であることを感じさせる。一方、Herderが訴えるものは心・血・生命(Herz・Blut・Leben)である。「私は生きている!」。この全ての「生」と全ての「感情」。これが「機械」か? Herderは歴史において...?...の個性を明確にしようとした。

なお、E.フッサールのEinfuhlungは「自己投入」。

2. 過去と異邦に対する理解。

『歴史哲学異説』の本来は民族、時代の個性の尊重と理解にある。人間の魂の本である。時代・風土の中にeinfuhlenしなければならない。これは実は、前のVicoがキリスト教の平等な説と評されたが、これを一層徹底させたのがこのHerderである。

地上の隅々の民族を平等に評価する。つまり、啓蒙主義は現代の尺度によって他の時代、他の民族を蔑視する。Herderはこのことを批判したのである。『歴史哲学異説』では、...?...。

...?...を幼年、エジプトを少年、ギリシアを青年、ローマを壮年として捉えた。少年の価値を青年の尺度では計れない。エジプト固有のものを別の時代の物差しで計ろうとするのは馬鹿げたことである。Herderはしばしば、Morgen rot(朝焼け)の比喩を使う。この「朝焼け」はHerderのシンボルである。「生」の朝焼け。つまり、幼年時代(原始時代)にはそれ固有のものがある。これを別の時代で計ってはならない。各時代にはそれぞれ固有の価値があり、それを見るべき。あらゆる人間・時代・文化は個性的現実を実現させている。

各時代は各々独自のかけがえのないものを持っている。これは感じる魂のみが感じられるものである。

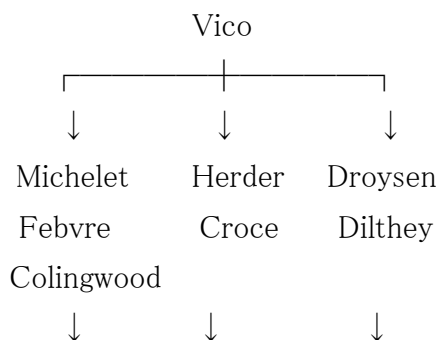
3. Herder の最も優れた業績は当時の中世観に反逆したこと。「我々の世紀の文明開化をもって、人類の到達した絶頂と見なし、過去のあらゆる数百年をことごとく野蛮・迷信・愚昧などと、けなしてはならない。」これは啓蒙主義に対する見事な反逆である。ゴシックは蔑称である。ゴシックにはゴシック特有の価値を感じたのである。後年のゴシック美術の再評価に繋がるものであった（ヴォーリンガー、ドボルジャークのゴシック美術研究）。

Herder は『歴史哲学異説』を次の言葉で閉じている。「人類の歴史は場合を連ねた無限のドラマである。幾千年に及ぶ世界中の人類の登場する神の叙事詩である。詩の筋道は錯綜を極めていて、一つの巨大な意味が全体を貫いている。」ドラマ的歴史主義。「時計」としての比喩に対するこの比喩は「ドラマ」である。「時計」と「ドラマ」。

コンドルセと Herder はほぼ同時代であるから、これで 18C の終わりまで話したことになる。

*Comte の positivism について。

この要素論では、歴史は過去に生じ、既に消滅したものであるから、この方法論では歴史は扱えない。



岸田先生の「西洋歴史思想の展開」を聴講して。

H11.2.7 永田和弘

人類の歴史は不便なところ、誤ったところを修正し改良して今日に至ったと考えられなくもない。ならば、今更ことさらに、過去の誤ったところや不便であったところを何も追体験したり復習したりする必要はないようにも思える。そのような役に立たないことに時間を潰す暇があるのであれば、過去を改良し修正したより正しいより便利な最新の事柄を学んだ方が良く

という見方がある。実はこれは決して正しい見方ではないのであるが、世間の一部にはこれが正しいように思う状況があるものだから、だから一方において、世間の一部において、いや、大部において疑うことに気が付けない状況が生まれている。知らずして盲目になっていることを教えるのは歴史である。この点がある故に、歴史家の任務は極めて大きい。しかし、この重大な任務のあること自体に気が付く歴史家も少ないのである。科学的な歴史学は歴史学の哲学を追いやってしまった。「歴史学において重要なことは科学することであって、哲学することではない」が妙に真実味を持つ今日この頃である。

理性の批判をどのように展開させるか。実際の西洋の現場における「理性の歴史」は、

現在の日本からの頭の中だけの理性批判では想像を絶するあり方が展開されていたことに驚くであろう。その様な過去を西洋が体験してきたことを忘れ又は知らないで、今日の西洋の断面だけを取り込んだのでは、日本は西洋の理性を真に理解することはできないであろう。その人の過去を知らないで、目の前の紳士の言葉を正しいからと言って信じるようなものである。今日の姿から隠され、消されてしまった事柄の中にこそ、知っておかねばならない重要なことがあることを教えてくれるのが歴史であり、歴史家である。

Naturalism	Historismus
Descarte	Vico
時計 モノ（時間的に不変のモノ） 知覚対象となるモノ	ドラマ (Herder) コト（時間的に推移する事柄） うつろい、変わり、消滅する行為である。 回想によってのみ再構成されるモノ
Condorset Comte の positivism	Herder Droysen, Dilthey, Croce, Collingwood, Febvre, Michelet 等。

戦艦大和は轟沈した。これは戦争を知らない若い人たちも知っている。では、その艦隊の戦死者が何人であるかを知っている人がどれくらいいるであろうか。およそ3700人である。これに対してアメリカの戦死者は14名である。前もって覚悟した通りの戦いであった。結果を見て愚鈍な戦いであったと考えてはならない。ここには深い意味がある。さて、問題であるが、歴史的事実とは何か。戦艦大和が轟沈したことは知っていても、その経過や結果を知る人がいないという事実もまた一つの歴史的事実である。私には後者の事実のほうが「重い」事実なのである。

もう一つ問題を出してみよう。江戸時代の百姓は天皇のために命を捧げて死んだであろう

か。戦うのは武士であって天皇のために命を捧げて戦う百姓はいなかった。では、日清・日露戦争で天皇のために命を捧げて戦う国民はいたであろうか。日清戦争は明治 27-28 年、日露戦争は明治 37-38 年である。江戸から明治へ 2,30 年で人の気持ちはどれ程容易に変わるであろうか。a)2,30 年ぐらいでは百姓が天皇のために死ぬとは考えられないという答えと、b)2.30 年あれば変わるという答えが出るであろう。a)については、多くの日本人が旧帝国憲法の下、多くの兵士が天皇のために死んだと思わされている今日の歴史的事実をどう考えるであろうか。b)については、国家の思想管理は恐ろしいと思わねばならないだろう。a)にせよ、b)にせよ、この問題は両刃の剣で、どちらの答えを出しても国家の怖さを教えることになる。歴史は「在りし事」ではなく、「作られた事」であることに気が付かねばならない。気が付くためには「哲学的歴史」をしなくてはならないのである。

終わり

その時、私はそこにいた

2000.8.17 永田和弘

1970 年頃のことである。その日の年月日は定かではないが、その気になれば日時はおろか何分何秒まで分かる極めて特異な日のことである。私は荒れ狂う大学紛争の時代の中、平均的なノンポリ学生として大阪駅前の梅田の群衆の一人であった。場所は阪急電車前の広場で、そこでは先ほどからゲバ学生の衝突劇が繰り広げられていた。私は大学生であるから、大学紛争とは直結しているはずの立場だが、ゲバ棒を振るう学生運動家達とは生きる空間が違う、デモにも一回も参加したことがない、平凡な恥ずかしき大学生であった。今日の話はその恥の上塗りをする話である。

国鉄大阪駅東口の南面には松下幸之助寄贈の巨大な高架陸橋があり、車の往来が激しい道路の上に架かって阪急百貨店・阪神百貨店・国鉄大阪駅を繋いでいる。その架橋上には頑丈な陸橋がたわわにしなる程多くの見物人が鈴なりであった。既に、道路は無法状態の広場と化し、車が往来する道路はゲバ学生に占拠され、遠く取り巻く野次馬とで革命争乱の雰囲気騒然としている。それに加えて、シュプレヒコールと退去を命じる警察並びに機動隊のスピーカーが鳴り渡り、あちこちで交通止めを食らった車が鳴らすクラクションが一層に状況を切羽詰まったものにしてている。時折起こる断続的なゲバ棒の打ち合う音が深刻さを増していく。阪急百貨店前あたりで騒然たる音と声が聞こえる。地上に立つ私には何も見えない。高架陸橋も既に人でいっぱい上れる状態ではない。その時、私の目に阪急百貨店前の地下鉄入り口の屋根が見えた。人が乗れる余地があるように見えた。走ってそこへ行ってみると、電線か何かがあって乗れそうもないから余地があるだけで、実際にはそこに上ることはできなかった。しかし、そこから電柱を上って阪急電車の大看板の基盤部分には行けそうだった。そこからは距離があるとは言え、ゲバ乱闘を斜め上方から直視できる格好の場所であった。子供の時から木登りが得意な私は地下鉄の屋根から電柱を伝って阪急電車の「阪」の字の大看板の裏に出た。この様な所に登っても良いのかという自責の念に駆られたが、驚くべきか、そこにも既に先客がいて、事態が今や急変するその

一瞬を待ち受けていた。「バシバシバシ」と音が起こった。眼の下でゲバ棒の撃ち合いが起こったのだ。ゲバ棒が上下に、又は、突きが数十本入り乱れて、もの凄い速さと力で激突している。剣道の素養とか防御とかは既に通り越えた、まともに当たれば殺すかも知れない激しい応酬である。このままでは誰かが死ぬと思ったときである。何もしないというかできない警察にどうなっているのかという雰囲気が流れたときである。ゲバ学生達の扇動に情動的に共感した野次馬が「反権力的」に動き出したときである。次の一瞬を固唾をのんで見守ったその時、阪急百貨店前の曾根崎警察署からスピーカーが鳴った。「陸橋の上の皆さんは全員降りて下さい」前代未聞のショーの幕開けを前に誰も動かない。しかし、きつく恐い恫喝に似た口調での促しに陸橋上からは人が消えた。私は自分の場所を正解と思ったのもつかの間、「阪急電車の看板の人も降りなさい。降りなければ逮捕する。」には肝を潰した。私の周りには人はいなくなった。年輩のおじさん風の人が、残っている私に「早くしなさい」と声を掛けてくれた。「一体、何が起こるのか」私は逮捕覚悟で身を看板の後ろに潜めてじっとしていた。先ほどからの喧噪と緊迫は一段とクライマックスを迎えていた。そのとき、大阪駅の北の方から車のクラクションと共に恐らくは2時間は待たされていた乗用車の解き放たれた集団が阪急前広場に突進してきた。その行く手の先々には警官が進行方向を指示し、ピッピ、ピーと警笛があちこちで鳴り響いている。この状況は流暢な交通整理というものではない。疾走を促される車も左右に自由に運転するというものではない。指示された方向に駆け抜けていく。そのスピードは恐ろしく速いものであった。待たされた腹立ちもあろうし、そのスピードでは人を轢きかねない注意からもあろう、ヴァーンと鳴らしっぱなしのクラクションは群衆を切り裂いた。モーゼは割れる紅海の中を進んだが、目の前の数百台の車は人の海を裂いて走り抜けた。その車の奔流は南の御堂筋方面に稲妻のように駆け抜けると共に、分岐した車列は東のOS劇場方面に奔走した。溜められた車の一斉放流は10分は続いたように思う。ひき殺される人が出なかったのが不思議なくらいの勢いであった。

南に直進する車列と、曾根崎警察の前で東進する車列に挟まれて、阪急百貨店前のゲバ学生達は、中州に取り残された状態となった。事態を察知したゲバ学生達は敵対していた姿勢を止めて逃げようとしたが逃げ場所はなく、一瞬にして警察に取り押さえられるところとなった。その中で目を引いた逮捕劇があった。逮捕されていたのは明らかにゲバ学生とは異なる風体の労務者風で痩せた中高年の男性であった。連行する警官にペコペコと頭を下げて謝っているが、一旦しよっ引かれる事態となったからには謝って許されるといった雰囲気ではなかった。年齢や痩せた体格、それに体全体で何度も頭を下げる様は貧相にさえ見えた。その連行されていく可愛そうな男の顔付きは場の雰囲気で乗せられて騒いだだけだとの弁解が遠目からでも見て取れた。恐らく彼は信念を持った確信的な政治行動家ではなかろう。もっと悪辣に警官隊に挑んでいた人はたくさんいた。その警官隊に挑発的な扇動された野次馬達は、ゲバ学生達を遠巻きにしており、分断する車の奔流の外にいたため、警察が攻勢に出たとたんにクモの子を散らすように逃げてしまった。逮捕された男は

その言動の過激さ故にではなく、単に中州の中にあっただから捕まった感じがした。全てが終わった。まだ梅田には余韻は残っていたが、道路は何事もなかったように車が普段のように交通を始めていた。長居は無用と大看板から降りたのは言うまでもない。このときの実感は「凄いものを見た」という興奮と「見つければ逮捕される」恐怖心、それに「申し訳なくも恥ずかしい」傍観者であることのみともなさであった。この阪急前のゲバ争乱は新聞社によっていろんな角度から撮影されたと思われる。もし、阪急の大看板の後ろに隠れながら下の光景を見つめている人影があればそれは私だ。私以外には看板の後ろには誰もいなかったからである。

翌日には小さくこの事件が新聞の片隅に報じられた。そして、大学紛争でゲバ騒動への検挙の中で、「市民から初めての逮捕者」が出たことが記載されてあった。定かではない日時だが、その気になれば分かるというのはこのことを指す。市民から初の逮捕者が出たゲバ争乱のその時、私は阪急電車の大看板の裏にいた。

あれから、30年経った。この事件は以上のように私の脳裏に焼き付いている。そして、この事件の評価も私自身の中で少しずつ変化をした。最初は権力が人民を支配するということはこのようなものかと思った。地上からでは、曾根崎署が采配したプランは全く見えなかったであろう。次いでは、この争乱を終結させたのは、警察の車両や機動隊の特殊車両でもなく、一般市民の車両であったということに気付いた。政治を批判する市民（ゲバ学生）が一般市民によって制圧される事件であるという認識である。そして、今は以下のように変わった。

もう一度30年前に戻れるとして、あの大きなパノラマの中で誰に戻りたいかを考えた場合、私は誰に戻りたいであろうか。ゲバ棒を振るう学生、ゲバ棒を持つ中には入れないが陸橋の上から声援を送る野次馬、取り締まる警官や交通整理をする警官、指示どおりに疾走させるドライバー……。やはり、私は私でしかないようだ。考えてみれば、私が回顧したドラマを権力の狡猾さに仕立てるのも一つの立場だろうし、30年を越えた今の現在が在るのもあの時の権力闘争で扇動者集団に毅然とした態度をとった結果だと仕立てるのも一つの立場だろう。この大きなパノラマに託して述べたいことは、恐るべきは権力ではなく気付かぬ自分自身であることである。市民がミーハー的課題に熱中しているとき（熱中させられているとき）、深刻な問題が市民の視野外で進んでいるかも知れぬ。市民を見る場合は、少し高い大看板の裏に登って見る必要があるようだ。

蛇足かも知れぬが、歴史を問う人間として、もう一言付け加えておきたい。あの大きなパノラマの中では皆が皆、信念を持ち正義を念じて行動をしていた。それらは新聞記事の中では数行である。月日の流れはそれらを飲み込み、その流れは歴史を作り、その中で採択される事実と廃棄される事実で事件は再構成されていく。あの事件は私の頭の中には上記の如くにあるが、私の外ではどのようになってしまったのか。後になって思えば、事件とはその場その時に生じたことそのものではなく、後ほど人が事実を取捨選択して再構成したものである。言い換えれば、事件とは人の外部で起こったものではなく、人の頭の中で起こっ

た事柄である。作文が混じろうが、一度事件として確立されると、その事件は事件として市民権を持つ。私が見た生の事件は単に私が言うだけの（市民権を持たぬ）事件であり、いわば妄想と言われても仕方がない事件である。歴史家の任務は「本当はそれは如何であったか」だけではなく、「それはどのようにして事実仕立てられたか」もまた重要な究明すべき作業である。（更には、実証しその事件に市民権を与えることまでもが追加されるべきであろうが、巨大なプロジェクトを組まなければ、実証することも市民権を付与することもできないだろう。組織と費用を考えると、後者については歴史家の任務を離れて政治家の任務となろう。）

日航ジャンボ墜落「ヴォイスレコーダー」公表とNHK「学徒出陣」に見知らぬ映像を見て本稿を記述する気持ちになった。 終わり